

小田原史談

第254号

発行所 小田原史談会
小田原市南町 4-1-24
松島方 TEL (23) 8635

サイパンで「玉砕」した父

須山 晴夫

父の除籍謄本

これ、私(小田原市栄町在住)の親父(幸之助)の除籍謄本なんだよ。

「昭和拾九年七月拾八日午後
参時零分マリヤナ島ニ於テ戦死、
横浜聯隊区司令官鈴木春松報
告、昭和貳拾年五月拾九日受
付㊦」

戦死ノ記載ハ錯誤ニ付昭和貳拾
貳年参月拾四日付神奈川地方
世話部□中川廉 死亡報告取
消通知、同月貳拾五日受付、
戦死記載抹消㊦」

はじめが死亡通知報告で、次が
その取消だ。今日は「父帰る」の
話をしよう。

「江嶋」から暖簾分け

私の実家は一丁田にある「かく
え(㊦)須山商店」で、砂糖と粉
の卸業。銀座通りにある江嶋さん
の番頭をやっていたお祖父さん
(巳代蔵)が、「違う分野のお店な
らしいよ」と、暖簾分けしてもら
った。江嶋さんの商標は「まるえ
(㊦)」、だから実家の商標は「かく
え(㊦)」というわけ。

江嶋さんのお寺が寺町の伝心
庵なので、お祖父さんが我が家
のお墓を伝心庵に作ったと思う。江
嶋さんのお墓は一番奥の敷地が
広い所。その横の横、割りとい
場所が我が家の墓地。

親父が言っていた。「お祖父さん
の代は相場場で一回、二回当たると
家が軒建った」と。これから砂
糖が上がりそうだとすると早め
に仕入れる。仕入値段との差益が

ほんの数円じゃなくて一桁余計
にもうかった、というような話は
してた。ハイリスク・ハイリター
ンというやつだ。

ところが戦争末期は統制の時
代だから食料品はみんな配給、地
域と人口で割り当て。砂糖が割
り当てられて来るし値段も決めら
れている。それを配ったら手間賃
をもらって終りで商売としては
成り立たない。だから、昭和十九
年から終戦までの一、二年は開店
休業に近かったと思う。

戦争が始まった時お祖父さん
はもう六十近くで親父に代を譲
って隠居していた。若いころ働き
過ぎたからもういいんだ、と。

出征・サイパン玉砕

親父に召集令状がきたのが十
八年末ごろだと思ふ。私が生まれ
たのが十九年の三月、だから私は
まだお袋のおなかの中。

「サイパンに着いた」という手
紙が親父から来て初めてサイパ
ンに行ったということが分かっ
た、とお袋が言っていた。当時は
どこに出征するか家族に知らせ
なかったのかな。サイパンはマリ
アナ諸島の島。だから除籍謄本に
は「マリヤナ島」と書いてある。

これはお袋が保管していたサ
イパン関係の記事が載っている
新聞で全部で二十三枚ある。ご覧
の通りもうポロポロで黄色くな

二五四号(平成三十年七月号)

目次

サイパンで「玉砕」した父

須山晴夫……………1

俺たち花の一中生

海野・橋山・山田・杉山……………5

二中誕生の頃

平倉正……………8

小田原の庚申塔を探して

中川哲也……………11

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝……………13

生誕四百五十年

風外慧薫の足跡を訪ねて(下)

野地芳男……………14

二宮尊徳と「論語」(五)

岩越豊雄……………17

富士フィルム草創記(四)

「眼」としての光学ガラス

荒河純……………20

片岡日記 昭和編(十三)

片岡永左衛門……………22

史談再録 風外上人と常光院の末路

穂坂辰巳……………25

平成三十年総会報告……………26

史談会セミナー予告……………27

新会員紹介・募集……………19

特別賛助会員・落穂集……………28

サイパン玉砕を伝える朝日新聞(昭和19年7月19日)



っている。同じ日に発行されている別の会社の新聞もある。親父がサイパンでどうしているか気が気じゃなかったらうね。

昭和十九年の六月十五日に米軍が上陸、七月七日に玉砕を決めて南雲中将らが自決したが、新聞がそれを伝えたのは七月十八、十九日でそれぞれ三つの新聞を取り置きしている。とにかく

くお袋は親父の玉砕を覚悟したと思う。

死亡公報

その後一ヶ月か二ヶ月後に我が家に「十九年七月の玉砕だから戦死」の知らせが国から来たんだよ。遺品として髪の毛だか爪だか分らないようなものも一緒に送られてきた。死亡日は「玉砕」

の日か何かになっていたと思う。覚悟はしていたものの実際に通知が来たときはショックだっただろうな。

だから親父のお葬式やった。伝心庵の墓地にお墓も建てた。葬式の写真も一枚お袋がちゃんと残してた。戦時中だから葬式も簡単よ。お祖父さんが洪い顔して、お袋が私をあやしてて、姉と上の二人の兄がいて。

お袋の頑張り

この本(『小田原空襲』井上弘、小田原ライブラリー、二〇〇二年)もお袋から渡されたもの。終戦の日、八月十五日小田原空襲について書かれた本。その中にお袋の体験談が載っている。

「瓦屋根を突き抜けたと思ったら途端に。パァッと燃え出したので、びっくりして直ぐ子供をおぶって飛び出しました。表の通りは真っ赤に燃えていました。が、通りの東側の方が早かったようです。焼夷弾が落ちる前に外がパァッと明るくなりましたが照明弾を初めに落とすから狙いをつけておとしたのではないですか。(須山スズ・当時三十歳)

「子供をおぶって」の子供は私の事だよ。当時兄・姉達三人は吉田

島に疎開していたが、お袋はお祖父さんと商売を続けるため乳飲み子の私と一丁田に残っていたわけだ。この時親父がいてくれたらと思っただろうな。お袋はただ子供四人を育てることだけでいいだったかも。しかし母親の強さはあると思うよ。

お袋の実家は松田で醤油醸造業をやっていた。その点では精神的に安心感があったかも。けどまず生きることと食料のことだったんだらうね。南足柄の沢(長生)さん(前南足柄市長)のお祖父さんの弟がお袋の父。だから沢さんは私とハトコになる。

私の実家も空襲で焼け野原になったけど、奥に倉庫がそっくり残った。そのコンクリートの倉庫の三分の一ぐらいに畳を敷いて住まいが出来ていた。店のほうは隣のバラックか何かでやってたと思う。

「お父さんは元気ですよ」

そんな生活をしているところへ、戦後間もなく突然見知らぬ人が店を訪ねて来た。そして次の様な信じられないことを言ったんだそう。

「須山幸之助さんはお元気ですよ。暫くしたら戻って来られます。」

その人はアメリカの捕虜収容

所からの引揚者で親父と一緒に帰った。一陣だか二陣だか早く日本に帰って来た人で、わざわざ我が家を訪ねてくれて「お父さんは元気ですよ」という一報を知らせて来てくれたわけだ。いいことは早く教えたいという気持ちがあったんだらうな。多分親父に頼まれて、住所聞いてね。偉い人だよな。まるでドラマみたいだろ。

ところがその人の住所と名前を聞かないで帰しちゃったというんだ。その人に会ったのはお祖父さんの弟だ。当時我が家の商売を手伝ってくれた人。だからお祖父さんが弟に、「お前、なんでそんなに気がきかないんだ！ こんな大切なことをしてくれた人にお礼をしなきゃいけないのに。住所も名前も聞かなかったのか！」と叱りつけたらしい。動揺したから住所なんか聞くどころじゃなかったんだ。死んだ人が生き返っちゃったんだもの。とにかく「玉砕」したんだから。でもそれから実際に親父が戻って来るまではドキドキだったらうね。その人の言うことは間違いないとは思っただらうけど。

父帰る

それから間もなく親父が帰って来た。死亡取消の届けが二十二年の三月だからその頃だろう。その日か翌日に、「お前はもう間違



父 幸之助さん

いなく生きてるんだから」と、お祖父さん親父が伝心庵に行つて親父の墓石を倒して来たんだと。当時は、戦死者個人の墓石を公費で建てる制度があったらしい。「お前よく帰つて来たなあ、これがお前の墓だけだ二人で倒そうよ」と言つたんだらうな。本当に嬉しかったと思う。

お袋は、「お父さん(夫)が帰つて来たからこそ五人姉兄弟がみんな大学に行くことが出来たんだ」と言つてた。

親父が小田原に戻つて来た時、朝、漬物とご飯と味噌汁を出したら、「おなかにもたれる。コーヒーとパンがいい」と。向こう慣れしちゃつて。それはお袋からしよつちゅう聞いてた。

それにしても、兵隊はみんな玉砕するべきだ、捕虜を認めない(「戦陣訓」)、だから全員に死亡通知を政府は出したのかな。

戦後の父と須山商店

戦後間もない頃は商売が殆ど無くて、親父は一年か二年、サラリーマン。サラリーマンと言つて

も食品一般に関連した半官半民みたいなところ。正社員か臨時なのか分からない。

商売にもどつたのは朝鮮事變の頃かな。お得意さんで一番量が多いのは業務店。三十キロの砂糖の大袋を菓子屋さん、パン屋さん、蒲鉾屋さん、漬物屋さん、旅館、酒屋さん等に卸す。昔は家庭用の袋がないから酒屋さんが量り売りする。スーパーの前のこと。暮れになると、お年賀用の砂糖を袋につめて箱詰めして持つて行く。私が中学生ぐらいに家庭用の砂糖の一キロが出始めた。大学に入るころ小田原の間屋では砂糖の扱い量は我が家がナンバーワンだった。要するに親父が帰つて来たおかげで商売も軌道に乗つて来たというわけだ。

しかし、その頃親父は捕虜だったという後ろめたさからか、私に戦争の話はしなかった。

戦争を話し始めた

私が大学に入った頃かな、親父が戦争について話し始めたのは。時も経つたし、時代も変わつて来たからだと思う。

親父が昭和十八年末頃サイパンに行った時は制海権が殆どなくなつて、約半分は着いたけど残りは撃沈された。だから無事にサイパンに着いたから良かった。

の人たちは、「あなたがたはいいですね、無事に着いたから。私たち船団の者はまた日本に帰らなくてはいけません。無事に帰れるかもわからない。日本に着いてもまた次の兵隊さんを戦地に送り届けなければいけない。我々は海の藻屑になっちゃう。あなたがたは陸にあがれるから船よりはましだらう。いくら鉄砲の玉が来ても避ければいいんだから」と言われた。

サイパンに着いて

昭和十九年二月初めにサイパンに着いたとして、七月の「玉砕」までの約五ヶ月間どんな生活をしていたのか気になるが、あんまり聞いたことはない。サイパンには軍の基地だけじゃなくて日本の民間人もけっこういたと言つてた。

アメリカは艦砲射撃で要塞地を徹底してたたいた後で上陸して来る。だから追い詰められてサイクリフから一般の婦人が飛び降り自殺したつていうのは親父も知つてたみたいよ。鬼畜米英の兵隊が来ると女性は狙われる。だから飛び降りたと言われている。

民間人は軍人よりずっと助かっているから、引き揚げた人も結構いる。私が子供の頃お手伝いさんやっていた家族はサイパン島

にいましたという人がいたね。引き揚げて来たのが戦後か戦前かは分からないが。

米軍がサイパンを占領したら、すぐに道路をほじくるブルドーザーを持ってきて飛行場を作ったと親父から聞いたよ。すぐに飛行場を作って、それでB29で日本本土を空襲した。

捕虜になった

親父が生きて帰ったのは、「玉も鉄砲も使えるものはないし、人間がぶつかっても意味はない。だから無理しないで手を挙げよう」と言ってくれた上官のおかげだったという。感じのいい方で職業軍人じゃなかったらしい。だからかな。

隠れて白い布をどこかに付けてとか、棒つ切れか何かで白い布を出せば向こうは絶対殺してこないとか。しかし詳しいことは私としては絶対聞けなし、親父も喋らない。自分が捕虜になったという後ろめたさがある、それは何となくわかるな。

兵隊がサイパンに何万人いたか分からないけど、「兵隊二、三十人に一人は助かった。どこどこ大学の医学部の合格率は何十分の一だけど、俺の命もそれくらいだ」というような言い回しを覚えてる。「だから運が良かった」と言うんだ。

ハワイから米国本土へ

捕虜になったのは七月二十日頃かな。その後サイパンに少しはいたかもしれないが、終戦はサイパンで迎えたんじゃないと思う。とにかくハワイに行き、それから米国に連れて行かれたことは話していた。残念ながら具体的にどここの場所だったかは聞かなかった。話もしなかった。だけど抑留生活の一端は話したよ。

向こうに行つて、一日に何時間か労働させられる。しかし強制労働じゃない。下士官とか一般の上等兵や二等兵は労働する。それで労働に対して賃金が出る。食事も出るし働いた分だけ小遣いが出せる。だから親父たちはタバコは買えるし、チョコレートも買える。アルコールはどうか分からないけど。親父は「捕虜になって海を越えてアメリカ行つて、美味しいもの食べてきた」ってね。

しかし士官は労働させない。ジュネーヴ条約というのがあって「士官はそれなりの待遇を受けていたのだから、捕虜になつてもその待遇を保持させることが人権上必要である」と書いてあるみたいだ。だから偉い人は働かないので自分の好きなものが手に入らないんだそうだ。

ハワイではパイナップルの農場、アメリカ本土では綿花の農場

で働いていたらしい。労働が辛かったというような話は聞いてない。朝食はパンとスープとか言っていた。クリスマスに七面鳥が出たつていうからね。

中国、東南アジア、シベリア、そういう所へ抑留された人の情報を聞くと、「アメリカは天国だな。捕虜で一番いいのはアメリカだ」と。それだけははつきり言っていた。

多分大きな農場で働いていた時のことだと思う。「機械や設備も整っているあんな余裕のある国と戦争しちゃあ勝てるわけはない。いくら精神的にどうだこうだ、大和魂だとか精神的に言つても、あんな物量があるところに勝てるわけがない」と。

サイパン再訪

「捕虜になった」と、親父は最初のうちは言いたくなかったんだらう。だけど後になって子供達にも近所にも「自分は捕虜だった」と話した。

私はまだ三十代ぐらいの時、小涌会という小涌園の出入りの商人の会があった。小涌園は椿山荘と同じ藤田観光だ。藤田観光がグアム島にホテルを建てたから、親父は小涌会メンバーと一緒にサイパンとグアムに行った。サイパンでは親父が先頭に立って説明に廻ったそうだ。「ここで俺は捕

虜になった」

と。四十年ぐらい前だな。ふっきたのかな。

もう時代が変わったしね。

親父が亡くなったのは昭和六十年の五月。七十二歳だった。

だけど我が家の場合は良

かったよ。私の友人は親父さんがサイパンで玉砕した為苦勞した。その人の前でこんな話は出来ない。複雑だよ。

(平成二十九年九月 小田原駅東口マロンにて。聞き書き 松島俊樹)

(付記)

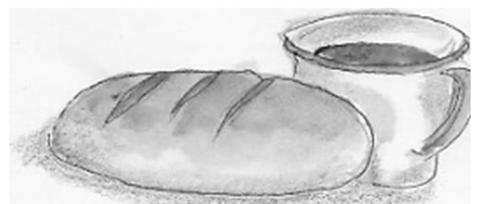
後日、須山さんより連絡があった。「お寺の過去帳を調べた。

天承院幸岳義賢居士 十九年七月十八日 俗名 須山幸之助

とあり、その上に

戦死ノ公報ニヨリ昭和二十年九月公葬ヲ営ミシガ昭和二十二年一月三日生還ス

と書かれた短冊状の付箋が付いていた。」



俺たち花の一中生(現・城山中)

昭和二十年、食料不足に苦しみながら敗戦を迎えた本町小・城内小の子供達はやがて昭和二十二年に発足した新制中学、一中(現 城山中)に順次入学していきます。昭和二十三年に入学した海野寛さん、橋山明充さん、山田彰夫さん、昭和二十五年に入学した杉山博久さんに一中の思い出を語ってもらいました。本稿はその話を松島俊樹が編集したものです。

本町小の子は怖いぞ

はじめに中学入学前の話からしよう。小学校一年から三年は男女一緒のクラスだったが四年以上は男女別になる。小学校六年の時学制改革があったからすぐに男女共学になってもいいはずだが何も変わらなかった。中学に入学すれば男女共学になるから面倒だ、そのまま、ということだったんだらうな。

旧制中学に入学する時は試験があった。しかし戦争終わって「旧制中学はなくなるらしいぞ。だから試験もない」という話を聞いて嬉しかったね。

中学に入ったら男女共学になるのも嬉しかったらう? うん、まあね。

それより中学に入ったら本町小の子と一緒にいるのがうんと怖かった。本町は荒っぽい。千度小路、代官町だらう。「おめえら」と言わない。「うぬら」と言ったん

だ。御幸ヶ浜でかっこうつけて赤禪なんかしてたら海に沈められちゃうぞ、と。一緒になりゃあそんなことないんだけど。反対に本町小から綺麗で上品な娘が来て感激した。今でいえばマドンナみたいだ。考えたらお屋敷町や老舗もあるから当然だ。

城内小と城内高に間借り

新制中学がスタートした昭和二十二年は勿論校舎がない。だから一年生は本町小、二年生は城内小、三年生は城内高にそれぞれ間借りしていたそう。

その頃、新校舎は緑ヶ丘に決まって建設が始まった。新校舎を建てるにはお金もいるし大変だったらうね。緑ヶ丘は昔避病院と呼んでいた隔離病舎があった所で、

そこに行くとは気がうつるぞ、行っちゃいけない、と親にさんざん言われて、遠回りしたもんだ。俺たちが入学した昭和二十三年、城内小の南側に七クラス、城内高の北端に二クラス。二年生は本町小、三年生は城内小だった(図参照)。一緒に集まって校長の話の聞くとか入学式なんて記憶にない。

本町小、城内小、城内高の生徒は我々が同居して迷惑だったらうな。

それでも教室が足りなくて午前、午後で二部授業をやっていたと思う。それに一時的だけれど五日制だったことも覚えている。な

トイレと天守閣と

その頃の悪ガキぶりを話そう

か。

城内高校を借りた者は困ったことがあった。女学校だから男子トイレが近くにない。だから城内小学校のトイレに行くか本町小学校のトイレに行くかどっちかだった。しまいには面倒だから天井裏で用を足したんだ。小便だからだんだん皆がやるだらう。天井裏に滲み出してきた。そんなこともあったんだよ。

そのころ職員室は本町小にあった。授業が始まると先生がそこから通ってきた。だからベルが鳴って教室で待っているがちよつと遅れるわけ。ちつとも先生が来ないと天守閣に遊びに行っちゃう。天守閣はまだ草ぼうぼうの頃。天守台、今の入口の石段近くには枇杷の木もあった。



昭和23年末 一中 教室位置図

「小田原市史 史料編 近代Ⅱ 付図B」と「城山中学校創立十周年記念誌」記事他を基に作成

新校舎に引越し

入学した年の暮れ、ようやく新校舎の第一期の工事が終わって先輩の三年生が引越し(図参照)、続いて二十四年の一月には二年生が引越した。だから我々一年生だけが城内小と城内高に置いてけぼり。一年生になった四月に我々九クラスのうち四クラスだけが新校舎。股裂き状態だ。だけど十月に校舎が全て出来

上がった。目出度く一年生から三年生まで全員集合。お祝いの運動会があったこと覚えている。工事が終わったばかりで危ないから石ころ拾いした。その頃は裸足で走っていたからね。

お祝いの文化祭も本町小の講堂であった? 全く記憶がない。どういふ連中がやったのかね。俺たちにはお呼びがなかったのかな。

英語の読めない英語の先生

学制改革で俺たちは旧制中学の試験がなくなると喜んでいたら、当時の先生は大変だったろうな。何せ降ってわいたようなことだもの。校舎はない、先生はいない、資金はない、教育方針はない、で、管理職の先生が一番大変だったろうな。「城山中学校十年誌」にそれが載ってるの? 読みたいな。(資料参照)

だって、英語の読めない英語の

先生がいた。教科書に仮名ふってきちゃう。生徒が質問すると分からないから校長室へ聞きに行ったらもんだ。杉本校長はもと城内高校の先生でアメリカ帰り、英語ぺらぺらだった。

ピアノが弾けない音楽の先生もいた。本当は家庭科の先生だったが代理だったんだらうね。

理学博士の中学教師

かというところな先生もいた。田原正人という理科の先生は帝大出で「一般生物学」という旧制高校向けの教科書を書いた人。タハラゾウリ虫の研究で日本一の理学博士。そういう人が中学の先生やっていた。疎開なのか外地から引き揚げてきたか分からないけど。東京の大学にまだ職が得られなかったのかな。だから数年いて東京に帰っちゃった。新制中学の教員免状なんて持っていなかったと思う。そういう先生もいた。

県野球大会優勝

文化祭にはお呼びがなかったけれど野球は強かった。ユニフォームは胸に「ODAWARA」。「一中」じゃない。コーチは五十嵐写真館の徳雄さんで日大のアメフト全日本の選手。この人が名コーチだった。

二年の時、忘れもしない、藤沢一中に三対ゼロで負けて県大会

準優勝だった。その時藤沢一中には衆樹という大変な剛球投手、今でいう江川みたいなのがいたんだ。我々よりも一年上。次の年、衆樹が卒業したお陰で県で初優勝した。保土ヶ谷球場。当時の鈴木十郎市長に優勝報告をした写真がこれだよ。小田原市役所は「田毎」の向かい側、法務局近くの今空き地なっているところにあった。



全国少年野球大会で八幡イーグルス準優勝

我々が中学を卒業した年、昭和二十六年。戦後で世の中荒れてるから子供達に悪さをさせないよう野球をやらせよう、というんだらうな、読売新聞と自治体警察が共催して、全国少年野球大会を始

めた。軟式野球。ただし十五才以下。チームは学校単位じゃなく仲間、いわばクラブチーム。

一中の野球部だった俺たちはこれを機会にまた集まって「八幡イーグルス」というチームを作った。この大会に出た。監督は勿論一中のときのコーチ、五十嵐さん。神静民報がその頃のことを詳しく報道してるからそれを見て欲しいね。とにかく後樂園の全国大会に出場することが決まった時は自分達も驚いたくらい。

さあ、いよいよ後樂園決戦。三連勝してまさかの決勝へ。

相手投手はのち慶応のエースになった林。しかし、残念、一塁・二塁のピンチでヒット性の打球を打たれてバックホームに投げようと突っ込んだライトが後逸、ランニングホームランとなって0-3で敗れた。

後逸した男は亡くなったが「あれが一生の不覚だった」と最近まで言っていた。

だけど何故ここまで出来たのか。相手チームには後にプロで活躍した選手もいたが我がチームにはいないよ。なんといっても五十嵐監督の指導力、それと一中出身の我々のチーム力だ。投手の秋元もよくやった。秋元写真館の息子だ。

しかし瀬戸明は小さな体だったが今でいえば最高殊勲選手。苦

労人だ。関東大会での活躍が神静民報に書いてあるだろ(昭和二十六年八月二日付神静民報参照)。

野球だけじゃない。軟式テニスでも一年後輩の太田・大綱さん達は県大会で優勝、小田高に行つてから全国大会で優勝している。

陸上競技の助っ人で優勝

俺は野球部だったけれど陸上競技部の助っ人だった。練習は普段は校庭で出来る。多分直線で百米メートルとれた。二百メートルは急な曲がりになつちゃうけど。

時々「来い、教えてやるぞ」と小田高からお呼びがかかる。回数はそのなにも多くはなかつたけど。だから一中というのは小田高の予備校みたいだった。

昭和二十七年の県大会、出来たばかりの三ツ沢競技場だったな、八百メートルに出た時の話だ。

我々田舎の連中は地下足袋式のシューズしか持っていない。ところが横浜の連中はみんなスパイクだ。そしたら一緒に競技していた小田高生が見かねて、「横浜がスパイク履いてるのに一中の生徒は地下足袋で走っている。可哀想だ。お前これを履け」と、なるべく小さいスパイクを俺に貸してくれた。三足までは間に合つたんだよ。残りの一人はピツタリするスパイクがなかった。「でもスパイクは三人だけでいいや。勝負つ

けちゃおう」と言つて男子優勝しちゃつた。

女子は酒匂中学が優勝、高校男子は小田高、女子は城内が優勝して小田原勢が総取りだったね。

花の一中から城山中へ

小田原の一中といつたら花の一中だ。運動も出来るし勉強もまあまあ。文武両道。

だから一中に越境して来る。お前、そつちにいって入れるだろうというのが来る。南足柄、湯本、熱海、秦野、大磯あたりから。一中でトップになれるわけじゃない、だけどこつちに来たほうが安全だから、と。

その一中に入学出来るからと城内小に越境で来る者もいる。城内・一中・小田高とひとつのラインが出来てしまう。学区内の生徒にとつてはいい迷惑だ。

中学三年で編入して来た者なんかもいた。まるつきり小田高に入る為だ。しかし後になつて平塚江南高のレベルが上がつてきたから、秦野、大磯などからは来なくなつたけれど。

とにかく一中というのはプライドが高かった。名前も一番だし他から見れば鼻につくし、そういうのがいけない、というんで昭和三十年「城山」という名前に変わつていったんだと思う。

資料

十年を顧りみて

「初代校長 杉本 正文

(前略)開校当時は職員二〇名、生徒六五〇名で本町、城内小、小田原高女の校舎を借りての分散授業で、教科書もなく、教具、器具はすべて借り物という状況で何かにつけて不自由であった。しかし、全職員はそれらの不便を克服し新しい教育に熱意を燃やしていた。また「母の会」が開校後、間もなく結成され物心両面より学校に対し後援されたことは今もって忘れられることのない感銘深いものがある。

しかし、なんといつても三か所に分かれての分散授業では、単に連絡を欠くというだけでなく、教育の効果を上げるにも支障のあることで、一日も早く新校舎を建設しなければならぬと痛感させることになり、二十三年、一月七日に第一期工事が決定を見た時は何にもかえられない喜びであった。しかし、この間の委員長を初め委員の方々の昼夜をわかたぬご苦労は筆舌につくせぬものがあり、この熱意がむくいられて工事も順調に進み、二十四年十月二十四日に竣工し、始めて全校生徒が一堂に会することができるようになった。これは私の生涯忘れれることのできなない喜びであった。(後略)

(城山中学校創立十周年記念誌)

ファインプレーの陰に咲く美談

(前略) 一中を出てから市内十字町の古田鉄工所に瀬戸は住込で、本田は通いで、働く一工員となつては練習なんか思ひもよらないのを、同鉄工所主人夫妻の理解でチーム編成と同時に練習も続けられ(中略)瀬戸は小兵ながら後樂園で左翼を守り対館山一中のピンチに敵の打つた三塁打乃至本塁打と思われる左翼越え大飛球を、斜めにバックにバックを重ね三百三十フィートの同球場塀際までバック、遂にとどかずと見てジャンプ、ギャクシングルで好捕するというファインプレー中のファインプレーを演じて味方は勿論、敵方からも嵐のような拍手で迎えられた好選手、

以来東京のファンは彼に「外野の神様」という敬称を奉つたそうだが後樂園での二つの戦いに遂に一つのエラーもなかったという天才ぶりを見せ、一鉄工所に働かせるにはもつたないという声が強かつたという。

父親に死別れ母親と姉が東京に住んでいるが、母親は後樂園での両試合を観戦に来て親子久し振りに対面、子供の好守に大喜びだったが優勝した瞬間、同球場の真中で親子相ヨウして嬉し泣きに泣いたという感激美談もある。

(昭和二十六年八月二日 神静民報)

二 中 (現・白鷗中) 誕生の頃

平倉 正

はじめに

昭和二十二(一九四七)年四月、学校制度の改革によって、新たに新制中学校が開設されることになりました。私はその新制中学校(小田原市立第二中学校)の一年生でした。

そういえば、小学校に入学した昭和十六(一九四二)年四月にも学制改革が施行され、それまで小学校とされていたのが「国民学校」に改称されました。いわば学制改革の申し子みたいなものです。

昭和二十二年、政府はそれまでの複雑だった学制を改革するにしました。あるいは、占領軍(GHQ)の指導があったのかも知れませんが、私たちの知るところではありません。

その年に国民学校を卒業した私たちは、これからどうなるのかサッパリ分かりませんでした。この制度改革によって新しく「新制中学校」に進学することとされたのです。その出来たばかりの新制中学校(二中)の生活を出来る限り思い出して記してみます。

「新制中学校」産みの苦しみ

もつとも、新制度への移行はそんなに簡単なことではなかったようでした。当時の諸資料を調べてみると、いろいろ紆余曲折があったようです。

「六・三制」(当時はこう略称しました)の施行が決定されたのが二月十日。四月一日の実施までにはわずか二ヶ月しかありません。小田原市では急遽協議会を招集したそうです。メンバーは国民学校校長四名、中学校長二名、市の学務委員、市議会議長の十一名でした。この時の協議で、

① 国民学校の卒業生を新しく中学校に収容するには三十学級を必要とする

② 一教室三十坪として約千坪の建坪を持つ校舎を建設しなければならず、その程度の中学校を二校新設しなければならない

③ そのための土地、建築資材、教育資材、机椅子などを備えなければならぬ

④ 費用は一校あたり五百万円と見積もって、約一千万円が必要ということでした。そんな莫大な予算をどこから出したらよいか指摘された模様です。

三月下旬になって切羽詰まった小田原市では、

① 生徒は取り敢えず市内の各校に分散収容する、通学区は協議会内の小委員会を決める

② 国民学校の六年生を新制中学一年生に、高等科一年生の希望者を二年生に、高等科二年生の希望者を三年生とする

③ 三月二十五日から四月十五日までは新学級の準備期間

④ 新教育補充のための授業を行う。校舎の整備、教員の選任・任命を行う

⑤ 新憲法が公布される五月一日をもって、「六・三制」教育を行うという暫定措置を決めたということです。

確かに新制中学校の「開校記念日」は、四月一日ではなくて五月五日になりましたが、「新教育補充授業」はどう考えても受けた記憶がありません。この間私たちはどのようにして過ごしていたのでしょうか。これも記憶が定かではありませんが、どうもそれまで通っていた小学校で遊び暮らしていたような気がします。

通学区(学区)が決まったのは三月下旬から四月上旬のことと思います。三月初旬に県を通じて「軍政部」から、小田原市では「旧市内に中学校は四校設置すべし」との要請があり、市は要請に従って、市内に四校の中学校の学区を

決めました。そしてようやく、私たちの中学は学区として新玉・山王の小学校学区、名称も第二中学校(仮称)と定められたのでした。

しかし、校舎の建設など間に合うべくもなく、第二中学校は新玉小学校の校舎の一部を借用して使用することとされました。何のことはありません、これまで通学していた学校の校舎の一角に、新中学生はそのまま通学することになったのです。

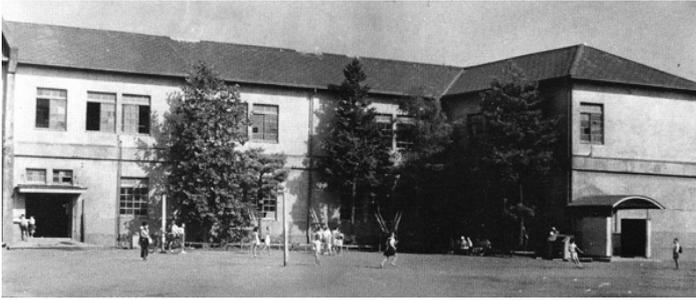
戦災の被害を受けた教室

ところが、新玉小学校は終戦直前に米艦載機の爆撃を受け、宿直室は全壊、隣接する講堂と私たちが入る校舎の一部も損傷していたのでした。

これから「新制中学校一年生」生活が始まるのですが、まずはその整理から始めなくてはなりません。大つばらに下駄履き(スック靴)など履いていた生徒は数えるほど、ほとんどの生徒が下駄か草履をはいていました。でグシヤグシヤな教室を掃除し整理するのが、真つ先の仕事でした。

窓は棧を残してガラスは吹き飛んでいた。春、夏はともかく冬場になると冷たい風が吹き込みます。新聞紙を貼っても直ぐに破けてしまいました。

そんな時救いの神が現れたのです。松風健次さん、当時五十二



開校したものの校舎はなく、新玉小学校の一部を借りての授業でした(昭和22年)

歳でした。たしかお濠端の広場、赤い太鼓橋の近くでお土産ものやお菓子を売っていた松風売店のご主人です。

出身は静岡県の清水で、いろいろ仕事をされたようですが、本職はガラス屋ということらしい。義侠心に富んだ人であったようで、その松風さんが被爆して大きな損害を被った新玉小学校の悲惨な状況を見かねて窓ガラスの修復を買って出られたのです。

大きなガラスは窓枠に合わせて切り、小さなガラスは短冊形に切って窓枠にはめてくれたのです。新品などあるわけではない時代

だったのです。

教職員の確保に苦勞

先生方の確保にも大変苦勞されたようでした。

神静民報紙によれば「四月三日現在で六十名の不足に対して、応募者はたった一人という状況で、市の学務課は教員の確保に苦勞している」と報じています。

そして、「下級中学(新制中学)の教師は、現在国民学校教諭の中から任命するにしても数が少ない。各学校の教師を任命するにしても、給与その他の点で、問題があり、中央からの指示がないため対策が分らない」とも報じています。

それでも「第二中学校」では、五月五日には、被災して天井のない新玉小学校の講堂で、教職員十四名、新入生一、二、三年生合計五百四十七名、十一学級で開校式を兼ねた入学式を迎えることが出来ました。新しい中学校のスタートでした。

当時の先生方の思い出が後に出版された「文集」に載せられています。その幾つかを拝借させていただきます。

『・五月五日より少し遅れての務めで、教師の定員不足の隙間に潜るかたちで教員になった訳だ。当時は教員免許状を持っていなかった。もちろん、在学中教職課程の科目はなく、教生としての経

験も積んでいない。唯一の資格は

大学専門部卒業だけである。：進駐軍の占領下におかれた制約のあったのを苦々しく思いはしたものの、暢気な一面も手伝い、教育にはズブの素人が、なんとか蛇におじずの類で教壇に立った。』

『戦後間もない昭和二十二年、桜花爛漫と咲き誇る際、新玉小学校の一隅に住する市立第二中学校へ、弱冠二十二歳の若者が赴任してきた。取柄はただ一つ、体内より迸る若さと活気だけである。まだ新米先生で、これと言ったものは何もない。ただ先生と生徒のコミュニケーションをどのようにしたら良いのか、それだけが大きな課題なようだ。：当時の生徒はみな素直で従順であった。指導する人、される人のわきまえが、きちんとできていた。本当に良い時代であった。』

新校舎の建設

校舎の新設も急ピッチで進められました。第二中学校の校舎敷地が、酒匂川畔の旧立川製作所跡地に決まります。第一期の校舎新築工事が終わった昭和二十三年の八月には、建坪百九十八坪、七学級が建設され一年生のみが新校舎に移転することが出来ました。

移転に際しては、生徒一人一人が自分の机と椅子を担いで、国道

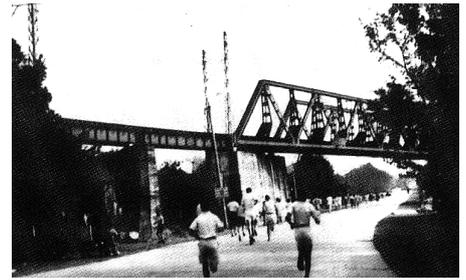
一号線を蟻の行列のようにゾロゾロと列を作って歩いて運びました。今では考えられないようですが、車両の数も少なかった当時のこと、事故もなく運び終えて新しい教室に入った時の感激は大きなものでした。

新制中学生の思い出

新制中学生になって最も戸惑ったのは、それまで小学三年生から男組と女組に分かれて授業を受けていたのが、中学になってから急に「男女共学」ということで、男女の生徒が隣同士で机を並べて授業を受けることとなったことではないでしょうか。

多くの男子生徒が、ついこの間まで特攻隊に志願して敵艦に体当たりして散るということを無上の夢としていた。それが女の子と並んで一緒に勉強するなんて落差が大きすぎたし、やはり照れくささがあったのです。

湯本往復マラソン大会も開かれました(これは男子生徒。女子生徒は板橋見附まで)。十二月の寒風を拂いて、国道を本校(新玉小学校)から湯本の三枚橋往復でした。国道を交通規制もなく懸命に走り抜けました。このマラソン大会はその後も二中の年中行事となり、現在も「海岸マラソン」として受け継がれています。



年一度冬期に開催されたマラソン大会、男子は湯本往復、女子は板橋見附往復

翌年の二月には文化祭も開かれました。学芸会かと思っていたのですが、生徒作品の展示会、バザール、音楽会それに演劇と盛り沢山。甘いお汁粉、上手な映画、堂に入った劇と呼びものの音楽会と初めての経験でしたが、またとない思い出となる行事でした。この文化祭も現在まで鷗友祭として受け継がれています。

新しい校舎は酒匂川の河口にあり、まだ木の香りが匂うようなピカピカの校舎でした。

川面を渡って吹き渡る涼やかな風、相模湾からの波の音、広がる砂浜、防風林の松籟を聞きながらの授業は他校にない日本一の教育環境を提供してくれていたと思います。ただ、新玉学区から通学する生徒にとっては、ずいぶん遠い道をたどって学校に通わなければならず、雨風の強い日な

どは苦勞させられたものでした。授業は科目ごとに先生が違ったり、教室を移動したりで、初めての経験がとて新鮮でした。

もつとも戸惑ったのが「英語科」の授業でした。何しろ戦時中英語は「敵性語」で、使うのがご法度でしたから、タバコの「ゴールデン・バット」が「金鶏」と名を変えたり、音楽の「ドラミファソラシド」は「ハニホヘトイロハ」と教えられた私たちには、アルファベットのAから教わらなければならなかったのです。

英語の授業ともなると、机の上で、その陰に頭を突っ込み、出来るだけ先生の眼から隠れるように息を凝らしていたものです。

網一色の校舎から山王橋までに焼き芋屋が何件あったでしょうか。五、六軒か、もつと多かったですかもしれない。放課後うす暗くなるころ、何よりも腹が減ってどうにもならなくなります。当時はまだ給食もなく、コッペパン一個の昼飯ではとても持たなかったのです。仲間どうしで五円、十円と出し合って焼き芋を買って食べたものでした。

「アツ、あれはなんだ？」

二階の教室の窓に寄りかかって、ボンヤリ外を眺めていた一人の友だちが素っ頓狂な声を上げ

ました。

「エッ、何って・・・」

数人の仲間たちが、その友の素っ頓狂な声に振り返って、窓際にぞろぞろ集まります。

「ほら、あそこ・・・」

遙か遠く相模湾の沖を指さします。遠い沖合の海上が、ひとときわ、大きな白波を浮き立たせてうねっていました。

「イルカだ！」

「そうだ、イルカだ」

予想だにできなかった光景を目のあたりにして、みな固唾をのみ黙り込んでしまいました。

凡そ四、五十頭はいたでしょう。か、波しぶきをあげ、我さきに争うように北上していったのです。

勢い余ってか空中に鉢大きく跳びあがっている姿も観ることができました。

みんなは口も開こうともせず、いつまでもわれを忘れて見とれていました。

今では「西湘バイパス」が通り、海の景色を教室から見ることが出来ませんが、当時本当にあった話です。

「二中」から「白鷗」へ校名の変更

昭和二十九(一九五四)年十二月の町村合併に伴って、ナンバースクール(南原)の廃止が教育委員会の方針となり、校名変更の作業が進められます。全校生徒に新しい校名

を募集したところ、「海に關したもの」、「太陽に關したもの」、「松に關したもの」など多くの校名案が寄せられました。生徒会、職員会、PTA委員会などの検討を経て数案に絞り、全校生徒の投票で、「白鷗」を採用することに決定されました。かくて第二中学校は、昭和三十年四月一日から「小田原市立白鷗中学校」と改名しました。校名の変更に伴って、「校章」も市章の梅にカモメを配したデザインに変えられました。

昭和二十六年に建築された木造校舎も、三十六年から鉄筋コンクリートの校舎に順次建て替えられ、数度の新・増築工事を経て昭和六十二年に講堂兼体育館、プール、造園工事により現在の校舎が完成し今に至っています。

運動場での卒業式

昭和二十五年三月二十二日、私は卒業式を迎えました。現在からみるとやや遅い時期です。

朝から快晴、でも風の強い日でした。講堂といった洒落た建物はなく、校庭に整列しました。

酒匂川からの強い風で校庭には埃が立っていました。それでも卒業式を迎える喜びと、これで中学校と別れる寂しさがチヨッピリ入り混じった、不思議な感覚に襲われたことを覚えています。

今となっては全て夢のようです。

小田原の庚申塔を探して

中川 哲也

はじめに

私は小田原市民ではなく横浜市民です。そのような者が小田原の庚申塔を調査しているのは、県内にいくつ庚申塔があるのかを調べているからです。その調査の過程で、各自自治体が刊行している悉皆調査(全てを調べる)資料に該当するものが小田原市には無いため、情報を求めて小田原史談会の会員、石井啓文さんに問合せしたことが今回の寄稿につながりました。

小田原市に悉皆調査資料が無いと書きましたが、小田原市の依頼によって調査されたものに『小田原の野仏たち』(西海賢一、一九八四年)があります。一部地域のため庚申塔は七十基程度にとどまっています。概論的なものには小田原史談会の元会長岡部忠夫氏の『信仰の跡を尋ねて―西湘地方の庚申信仰』(二〇〇四年)があります。こちらは調査された庚申塔のリストは無く、小田原市外の庚申塔も含まれています。個人調査資料としては『小田原の庚申塔』(房園敏子、一九八三年)が八十基ほ

ど。『小田原の石仏案内』(高峯良一、二〇〇四年)が百六十基ほど。県内五千八百基ほどを調査した森永五郎氏の小田原市分は百三十基ほどがあります。これらの資料にはそれぞれに漏れがあり、総計すると百七十基ほどとなりました。二〇一八年冬の時点ではこれに十基ほどの追加がある状態です。

この十基は小田原市内の調査をひととおり終えた後、再調査によって見つかったものです。再調査の理由はいくつかありますが、大きな理由としては二つあります。一つ目は、見つけられた庚申塔を村別に分類した結果、庚申講はあるのに庚申塔がみつからない村があるので、本当に無いのか確認すること。この中には、『新編相模国風土記稿』(以降、風土記)に庚申塚がある」と記載されて

いる千代も含まれていました。もう一つは、東京、埼玉、千葉、群馬で見つかっているが神奈川には見つからない中世の庚申塔が、小田原にある可能性が高いと考えているからです。この二つに併せ、小田原の庚申塔全体についても述べて行きたいと思えます。

小田原市内の庚申塔の傾向

小田原市内の庚申塔の特徴は、難解な銘文が多い点です。上曾我にある「無功德」や「直指人心見性成佛」の銘文、栢山の善栄寺や久野にある「上命三寶中報四恩及下六道皆同供養」の銘文などは曹洞宗ならではのものです。池上には庚申信仰の由来や目的を長文で彫った庚申塔があります(写真1)。庚申信仰の本質は、体内にいる三尸(さんし)の虫が庚申の晩に宿主が寝ると体を抜け出し、宿主の悪行を天帝に告げ、天帝は罪

の重さによって寿命を縮めるため、三尸が体を抜け出さないように一晩中起きているか、三尸を退治してしまふことで長生きできる、というものです。池上の銘文は、これが道教由来であることを知っている内容で、村人が作れるような文章ではありませんので、これも池上村にあった眼蔵寺(曹洞宗)が関与していると考えています。

桑原の浄蓮寺には、大無量寿經の偈文と庚申信仰を混ぜたような銘文が長々と彫られています。同所には浄蓮寺の名前が彫られた青面金剛塔もあるため、浄土宗も庚申信仰を扱っていたことが判ります。密教系も県内では見たことのない真言(梵字)を使ったものが下大井にあります。長文かつ難解すぎる上に風化していて未だに解読できていない庚申塔も、南町の報身寺や風祭山中などにあります。



(写真1) 池上 99 にある正徳 4 年塔の銘文。正面に「庚申供養塔」とある。(『神奈川の庚申塔事典』鷹取昭著より)

この他、足柄平野全体の特徴にもなりませんが、山王信仰との習合塔が目立ちます。山王と庚申は、

本来は別の信仰ですが、山王の神使である猿と、三戸が宿主の悪行を見ない聞かない話さないようにと願う三不猿(不見不聞不言)が結びつき、そこから山王と庚申が習合したとする説が有力です。しかし山王系の石造物に彫られている猿は二猿がほとんどで前述の説は定説ではありませんし、二猿と二鶏が彫られている石造物は由来が不明であれば山王信仰による造立と見なし、庚申塔には含めない研究者もいます。ところが「山王庚申」と併記している石造物もあつたり、「庚申供養」の銘文や三猿はあるが「山王」とは彫られていないにも関わらず、風土記には山王権現と記載され、現代でも山王さんと呼ばれている庚申塔もいくつあつたりします。

小田原ですと、矢作にある如意輪観音立像の延宝七年塔(二六七九)は風土記に「山王社、村の鎮守、神体石像で延宝七年の銘」であることが書かれています。これに山王の文字は無く「為庚申供養二世安楽」としか彫られていません。神体石像だけなら完全に庚申塔です。また、延清にある石祠には正面に「山王大権現」、裏面に「奉造立庚申供養為二世安楽」と彫ら

千代の庚申塔

風土記には千代村に古塚が六つあり、その一つが庚申塚であると記載されています。しかし千代にある寺社を全て現地調査し、聞き込み取材をしたものの見つけられず、ずっと気に掛かっていました。岡部氏は前記著書のなかで、足柄平野は庚申塔が少なく、それは酒匂川の洪水が原因ではないかと推理しておられます。しかし千代は台地になっていて、どこかに残っているのではないかと考えていました。

小田原史談会の石井さんは庚申塚をご存知なかったものの、資料として『相模国村明細帳集成』(以降『村明細帳』)の三巻に小田原地域の村々が掲載されていること、『神奈川県皇国地誌残稿』(以降『地誌残稿』)も参考になるので、などのアドバイスをくださいました。『村明細帳』には千代村が掲載されており、天保五年の『地誌調査上帳』(風土記の基礎資料)に古塚として「庚申塚」。字名として「庚申塔」が記録されていました。一方、『地誌残稿』にも明治九年の原稿として千代村はありましたが、こちらには塚も字名も記録がなく、明治の時点で逸失となっていた可能性も出てきました。字名は『土地宝典』を参

考にしましたが、千代に字「庚申塔」は無く、半ば諦めていました。

しかし何度目かの訪問で運良く子供の頃から千代に住んでいた方に出会え、庚申塚かどうかは判らないものの、三つの場所を思い出してもらえました。そのうちの「子供の頃に節分の豆まきで行ったことがある」という場所へ行ってみたところ、塚状の盛り上がり頂部に庚申塔が残っていました。小躍りして喜ぶという表現がありますが、まさにその通りとなりました。ただし紀年銘は明治九年でした。以下は想像ですが、『地誌残稿』の基礎資料を作った当時(明治九年頃)、塚は残っていても庚申塔は無くなっており、小字としても無くなっていったのでしよう。それが資料作成にともなう「そういうえば庚申塔があつた」と話題になり、再築されたのかも知れません。風土記に庚申塚が記録されていること自体が珍しく、その現存を確認できたことは貴重な成果でした。

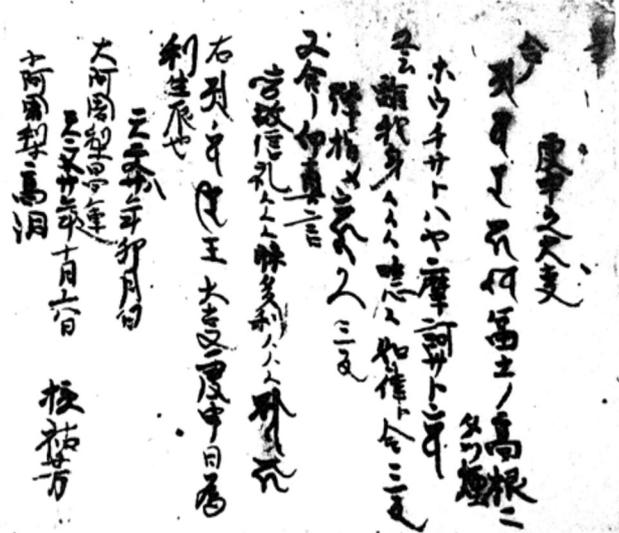
小田原に中世の庚申塔はあるか

関東地方は全国的に見ても庚申塔が多い地域で、神奈川県も調査できた数は六千百基ほどになっています。埼玉県や千葉県は一万を超えているようで、関東全域ではいくつになるのか不明ですが五万基はあると言われています。

す。その中に江戸時代以前の中世に造立された庚申塔がいくつも見つかっており、今のところという註釈は付きませんが、現存最古は埼玉県川口市の実相寺が保管している文明三年(一四七二)緑泥片岩板碑になります。これ以降、千葉、東京、群馬で中世の庚申塔がいくつか確認されています。しかし神奈川県で確認できた最古塔は横浜市鶴見区の宝泉寺にある寛永十年(一六三三)の宝篋印塔で江戸時代。それより古い庚申塔は私を含む庚申塔マニアも存在を知りませんし、神奈川県立博物館の学芸員氏もご存知ありませんでした。

庚申信仰自体は中国の道教が発祥です。奈良時代には日本に伝来しており、平安時代は朝廷貴族や僧侶達が守庚申を行い、鎌倉時代になると貴族趣味だった源実朝が守庚申をやったような記述が吾妻鑑に残っています。ここから御家人衆の武士に広まり、いわゆる戦国時代は織田信長もやっていますし、千葉県では城跡から発掘された庚申板碑もあります。神奈川県域では、金沢文庫に天文二十年(一五五二)の「庚申之大事」という古文書(写真2)が残っていますので、中世に庚申信仰が行われていたことは確実に

す。天文二十年頃の神奈川県は、



(写真2)

申上げるまでもなく後北条氏の版図でした。初代の伊勢宗瑞は朝廷文化に造詣があった可能性があり、以降も近衛家との婚姻をしていますし、庚申待をしていた可能性がゼロではありません。後北条氏の首都でもあった小田原は人口も多かったはずで、後北条氏がやっていなくても、中世の庚申塔が隠れている可能性は高いと考えています。

前述の他県は鎌倉時代から流通していた石材の緑泥片岩が入りやすい立地も関係しています。神奈川県にも流通はしていますが、小田原は相模型板碑とよばれる違う系統の石材が流通して

いました。代表格は国府津の宝金剛寺にある「建武古碑」で、同系のものに板橋霊寿院の寛永十六年石塔があり「庚申結等」の文字が残っています。なお、庚申塔を含む庚申信仰物での小田原市最古は今のところ、飯泉観音の梵鐘で寛永六年(一六二九)銘、「庚申之衆」の名前が刻まれており、「小田原住宮原多兵衛内主鐘木初夏鐘」とも彫られています。武士なのか商人なのかは不明ですが、どちらにしても後北条時代から小田原に住んでいた人物で、

(横浜市在住)

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝

まだ昭和の年代の頃、俳句仲間友人三人と知り合いの民宿へ誘われて出かけることになった。小田急登戸で南武線、立川で青梅線へ、御岳駅よりバスで滝本に着き、そこからケーブルで御嶽へ。友人の知っているお店だったので、特別にお蕎麦を作ってもらって下さり、ゆつくりと二階で昼食をすませた。御岳山の神社へは初めてリフトに乗ってとても楽しかった。明日お祭りなので神社では大勢の人達が支度で忙しそうだった。御岳神社は軍(いくさ)の神様だそうで中々立派な建物で勇壮な感じがした。昔の武士達は戦(いくさ)が始まると遠くからも勝利の祈願に馳せ参じたそうだった。今でも時代劇の撮影に度々此処の風景が利用されるそうだった。三人でうやうやしく参拝した。何段もの石段を降りて今夜ご厄介になる原島荘に着いた。途中売店で花豆を買ったらおまけにお杓文字(しゃもじ)をいただいた。玄関に着くと、疲れたが楽しかったと三人同じように腰をさすっていた。夕食は珍しい山菜料理で数えたら十五種類もありびっくりした。どれも手のこんだものばかりで山菜料理のこんなに美味しいごちそうは初めてのよう気がした。

春蟬や婆の作りしずんだ餅

絵の新しいお風呂で疲れた体もいっぺんに楽になったような気がした。三人の楽しいおしゃべりで夜は更けていった。

朝六時起床、鶯の清々しい声で目覚め、天気は上々、朝食も素晴らしいごちそうだった。売店で手作りの箸入れとわさび染のハンカチを買った。お勘定も予定していた金額よりずっと安くしていただき、悪いと思いつながらお言葉に甘えてしまった。帰りの道でお祭りの行列に会えたり、昨日の売店で買物しケーブルで降りた。少し歩いて川合玉堂美術館に入った。私は玉堂の絵は好きで、やわらかな筆あと、必ず人が一人歩いているやさしい風景には何かとても郷愁を感じてしまうのである。いい折があったらまた来たいなどひそかに思っている。お茶屋で甘酒をいただき青梅線、南武線と乗りつぎ、登戸の駅前で昼食をすませ小田急で帰途についた。

青鳶の窓に夕映え残りけり

二日間の楽しい静かな山の中の暮らしに心が清められたような気がして、本当に有意義な旅だったと心から感謝している。

生誕四百五十年・よみがえる珠玉の禪画

風外慧薫の足跡を訪ねて(下)

野地 芳男

はじめに

先号では、風外の生誕地である上州碓氷郡土塩(ひじしお)から、小田原成願寺を経て、田島および上曾我の洞窟での坐禅生活に至るまでを描いた。

今号では、その後の真鶴、伊豆原木そして終焉の地である遠州金指まで風外の足跡を辿ってみたい。

真鶴の風外天神堂

風外は、寛永五年(一六二八)に上曾我から真鶴の海岸の岩屋に

移って坐禅した。六十一歳であ

った。そもそも真鶴に向った動機は何か? 法系における大雄山との関連はあるのだろうか?

小田原の成願寺と真鶴町岩の滝門寺(りゅうもんじ)は、いずれも大雄山・最乗寺の輪住であり、しかも住職は両寺を兼務していた。曹洞宗の古刹・雙林寺(群馬県渋川市)、名刹・最乗寺(南足柄市)、成願寺(小田原市成田)、滝門寺(真鶴)は法系で繋がっている。前述した鶴峰聚孫(かくほうじゅそん)大和尚は師であり、風外道



晩年の代表的な風外禪画



真鶴の「天神堂」

人は純禅に徹し、幕府に抗するも法脈から離れることはなかつたに違いない。

この真鶴には二十余年もの間止宿した。今も滝門寺に風外墨蹟(十二幅)が所蔵されている。滝門寺の「供養控帳」によると、寛永年間(一六二四-一六四三)に本堂を建立した。この時、襖裏に風外墨蹟を張つたと思われる。

風外が棲んだ天神堂は、真鶴港の南向き岩場で、冬場でも暖かい。『新編相模国風土記稿』に「風外天神堂は寛永七年の開基」とある。この天神堂は五味家の所有地で、五味家は名主・資産家であった。

真鶴港に面した天神堂の岩屋は、崖の階段を上がったところにある。風外は梯子をかけて上り下りしていたようだ。傍らには水量の豊かな井戸があり、生活に格好の蝸室(かしつ)であった。この地は地主の五味伊右衛門演貞の崖地である。

寛文十二年(一六七二)の「相州

西郡西筋真鶴村書上ヶ帳」には「天神堂本尊天神木佛風外道人寛永七年に開闢仕候當年より四十年寺内御免地にて御座候」と書かれている。当初の天神さまは木仏であったが、慶安元年(一六四八)に石造に代えられている。

天神堂の寿塔には、次の詩が刻まれている。

落葉飄風前 栄華豈可伝
全身知石塔 堪笑幾隋縁

貴船神社の風外の遺墨には「貴船明神縁起書、寄進奉加状、鴉窟(しとどのいわや)縁起書、真鶴八詠並引など」がある。注目すべきは、貴船明神縁起書には「千時慶安三庚寅季桃浪吉辰風外八十三歳時写焉」とあることである。

現在、東京墨田区の弘福寺に安置されている風外の「咳の翁婆」は、真鶴で刻んだ石像である。小田原藩・稲葉正則公が風外禅師を信奉し、菩提寺である向島の弘福寺に移した遺品である。

かつて真鶴には「雨こんこん降ってきた、天神堂の坊さんに、蓑笠もってゆこう」という子供唄があったと松本町長は語っていた。私事であるが子供の頃、母は雨が降ると、この子供歌を唄っていたことを思い出した。母

は明治三十一年(一八九八)の足柄下郡生まれで、この童謡の坊さんとは風外のことであった。

伊豆原木の竹溪院

東海道・三島と伊豆の修善寺間に原木(ばらき)駅がある。伊豆原木の竹溪院は、かつては小さな草葺のお堂で、しかも無住であつたという。今は、約百坪ほどの空地で三体の石像物のみが建っている。竹溪院の本尊は、隣接の曹洞宗・成願寺に祀られている。

この地の旧家・堀江家に、かつては風外の自画像があつた。残念ながら焼けて、今は達磨画だけが残っていると松本越氏は語っていた。

風外がこの原木に居住したの



引佐高校前の風外の墓

は僅か二、三年ほどで、その後浜名湖在の金指郷石岡に旅立っているため、この竹溪院には風外の伝説は多く残されていない。この時すでに風外は八十六歳と高齢になっていた。

最期の地・遠州金指

晩年になって、なぜ伊豆原木から遠隔の地である遠江国引佐郡金指村石岡に足を運んだのか? 後の風外研究家は諸説を述べている。

前述したように、風外禪師は曾我山、真鶴そして伊豆原木に住処を求めた。風外は放浪の身であつても、徳川幕府による宗教統制のもと、法系を離れることはできなかつたと考えられる。自説として、やはり大雄山・最乗寺と鶴峰聚孫大和尚は大きな存在であつたに違いない。小田原・成願寺の住寺・上曾我洞窟(隣接の竺土寺は最乗寺の開創・了庵慧明)・真鶴(自泉院・滝門寺)

伊豆原木の成願寺(隣接に竹溪院)・遠州の円通院は法脈で結ばれている。雙林寺開山の月江正文は最乗寺七世である。また月江は遠江国・楞嚴寺(りょうごんじ)の開山でもある。前の項で述べたように、そもそも鶴峰は遠江国の円通院より進出し、雙林寺十三世に就いた実力ある大和尚であつた。

風外は法系に従い、師・月江正文および鶴峰大和尚の地・遠州に向かって旅立ったと推考される。

遠江国金指郷石岡に辿り着き庵を結んだ。これを「単丁庵」と名付けた。この地は今泉家の土地であり、その裏庭に風外の居住跡「単丁庵」と古図に記されている。しかし風外と今泉家の関係は定かではない。

さて、風外最期の地である

引佐高校前の地は寺前と言ひ、かつて寺屋敷があつた所である。伝説では、風外は村人に青銅三百を与え「ここに穴を掘ってください。穴に入ったらどうか埋めてください」と願つたという。驚いた村人の知らせで、村長が駆けつけたときには既に息絶えていた。後世の人々は、この死を「立ち往生」と称した。没年は承応三年(一六五四)、八十七歳だったと伝えられている。今はこの地の有力者により、風外禪師の墓が建てられている。

向島・弘福寺の「咳の爺婆」
浅草から隅田川に沿つて渡ると、東京スカイツリーは目の前である。

弘福寺の山門は二重屋根で、黄檗宗(おうばくしゅう)の禅寺である。この寺では、幕末の勝海舟



向島・弘福寺の「咳の爺婆尊」

が坐禅したという。山門を入ると右手に「咳の爺婆尊」と称した二体の石像が並んでいる。この石仏は、風外慧薫禪師が真鶴の洞窟で父母を偲んで自ら刻んだ石像である。

この寺の開基は小田原城主・稲葉正則公である。稲葉正則公は洞窟に残された翁媪尊を引き取り菩提寺の弘福寺に寄贈したと伝えられている。

また、この寺には布袋像が安置され、隅田川七福神コースとなつている。何故か風外が布袋画を好んで描いたことも奇縁である。

この寺には、風外の名から風邪によく効くとの信仰が生まれ、咳を病む人が祈願し、全快したら煎り豆と番茶を添えて供養すると伝えられている。このことは曾我・田島の七号洞窟の「小石」

と共通した伝説である。恐らく弘福寺を訪れる多くの人は、風外の禅画僧として真の姿を知らないのではと思う。

風外禅師の禅画・墨蹟

風外慧薫は達磨や布袋など、多くの禅画を描き遺している。江戸時代には、谷文晁や滝沢馬琴などは「風外自画像」を好んで収録した。画題は祖師の達磨、布袋、寒山拾得、船子夾山(せんすかつさん)などと、山水画である。なかでも達磨画と布袋画が最も多いのが特徴である。

注目すべき風外作品は、禅の始祖・達磨の「芦ノ葉」に乗った達磨画に自画像を重ねていることである。風外の心は達磨である。私見であるが、まさに禅僧・風外は純禅僧であった所以である。特に、生き生きとした布袋を好んで画いている。また、風外の墨蹟には独得にして流暢な風韻があるといわれている。

これ等の風外作品は、明治・大正期に風外研究者・倉橋達之祐氏が百余点蒐集していたが、残念ながら関東大震災時に東京で焼失した。その後、再び倉橋氏は三十余点を収集し、小田原の実姉に預けられた。昭和期になって平塚市の蒐集家・高瀬慎吾氏が風外画を蒐集し、平塚市に寄贈された。また昭和期、曾我地方

の農家には風外達磨画や布袋画が数点あったが、破損や紛失したと聞いている。

以下に風外作品(禅画・墨蹟および石造物など)の所蔵リストを挙げる。

- (一) 主たる書画・彫石
- ・平塚市博物館(57点)・達磨34点・布袋画11点、
- ・永青文庫(書画8点・瀟湘八景図3点)
- ・群馬県立近代美術館(書画3点)
- ・神奈川県立博物館(書画2点)
- ・富岡美術館(書画2点)
- ・成願寺(瀟湘八景図2点)
- ・個人蔵(書画数十点)
- ・真鶴町の風外遺蹟
- ・(鴉) 巖屋縁起・寄進奉加状
- ・貴宮大明神縁起・壽塔
- (二) 咳の翁婆像
- ・東京都墨田区向島・弘福寺
- (三) その他
- ・厚木市の知恩寺(達磨図1点)
- ・幕末の文人画家である渡辺華山は知恩寺を訪れ、住職から後水尾天皇の書簡と風外慧薫の禅画を鑑賞したという。

まとめ

風外慧薫禅師は戦国の世、上野国の山間の寒村で生まれた。幼くして母親と死別し、村の乾窓寺に預けられた。風外は幼少

にして仏教者として、優れた資質があったという。上野国の雙林寺をはじめ多くの名利の門を叩き修行した。

時に曾我山の洞窟で坐禅し、民衆に禅書画を描き与え、求道一筋に打ち込んでいた。達磨図や芦葉達磨図は自照図にして、自らを達磨大師に重ねている。

また風外は布袋画を好んで描いている。生涯にして弟子も受け入れず、まさに生涯を禅一筋に、庶民と共に生きた純禅に徹した画僧であった。

風外の作品は平塚市博物館をはじめ、多くの禅画蒐集家が愛蔵している。近年はアメリカのギッター・イエレン夫妻や、世界的に有名なマネジメントの父・ピーター・F・ドラッカーは珠玉の水墨画として称賛、風外禅画は高く評価されている。

平成三十年は風外の生誕四百年にあたる。これを記念して、群馬県安中市・ふるさと学習館および小田原市・松永記念館にて風外慧薫に関する展覧会が予定されている。

(主な参考文献)

- (1) 『月坡禅師語録』月坡道印(一六八〇)
- (2) 『日本洞上聯燈録』嶺南秀恕編(一七二七～一七四二)
- (3) 『新編相模国風土記稿』

「風外慧薫」生誕450年記念 特別展開催

日時： 10月20日(土)～11月25日(日)

場所： 松永記念館

風外の眠って居る作品を探しています。

風外慧薫は質素な生活を送り、描いた禅画を米などと交換して暮らしていました。そのため、曾我・下曾我・国府津地区には、まだ知られていない作品が眠っている可能性があります。郷土文化館では、彼の作品や情報を集めています。「家に作品がある!」「地元で伝わっている話がある!」という人は、郷土文化館までご連絡ください。(小田原市郷土文化館 23-1377)

- (一八一四)
- (4) 『奇僧風外の事蹟』松本越(一九三二)
- (5) 『風外慧薫とその作品』高瀬慎吾(一九六〇)
- (6) 『風外禅人の遺墨』竹内尚次(一九六六)
- (7) 『風外慧薫の研究』松本敬(一九七〇)

二宮尊徳と『論語』(五)

寺子屋石塾主宰

岩越 豊雄

世のため人のために生きるという
こと

雍也篇一三にこうあります。

子、子夏に謂いて曰く、女、
君子の儒と為れ。小人の儒と
為るなけれ。

先生が子夏に向かつていわれ
た。自分を磨き、世のため人のた
めに役立つ学びをする人に成り
なさい。ただ自分を人によく見せ
るための、役にも立たない学びを
するような人に成ってはならな
い。

「儒」の語源は人+需(ジユ)で、
需とは雨乞いをする巫女の意味
です。そこから、しなやかな意味
や、おだやかな人、学者の意味を
表します。

『説文解字』(文字の成立と原義を
説明する書)には「儒」は「柔」な
り「潤」なりとあります。物柔ら
かに、無理なく教えを注ぎ、しみ
こませる人というのが元々の意
味です。そこから、そのようにも

のを教える学者を意味するよう
になりました。ただし、孔子以後
は「儒」とは孔子の教え、つまり
儒教を信奉し教えを広める儒学
者のことを意味します。

「君子」とは心が広く、学徳の
ある立派な人のことです。徳は得
なりとも言います。人に得を与え
られる人。つまり、世のため人の
ために心を向けられる人の事を
言います。

「小人」とは、その反対に、心
が狭く、自分の事しか考えられな
い、つまらぬ人のことです。「つま
らぬ」とは文字通り、それ以上つ
まらない、受け入れられない、許
容量がない人という意味にもな
ります。君子と小人は『論語』に
はたびたび比較されて出てきま
す。

学びも習い事も心境が進めば
己だけが楽しむのではなく、人をも
楽しませ、人の役に立つ心掛けが
必要だということになります。

それにしても今の学習、学問は
己のために、人に評価されるため
に、という事に偏りすぎているの
ではないでしょうか。

また子張篇六に、学びには世の

ため人のためという篤い志が大
切だという章があります。

子夏曰く、博く学びて篤く
志し、切に問いて近く思え
ば、仁其の中に在り。

「子夏がいった。ひろく学び、
世のため人のために志し、さし迫
ったことを問い、己れのこととし
て考えるなら、人としての道、仁
はその中に自ずと現れるのだ。」
と解釈します。

「博学」とは、ひろく学問をす
ること、「篤志」とは、篤く道を志
すこと、「切問」とは、自分に切実
なことがらを問いただすこと、
「近思」とは身近な自分の問題と
して考えるということです。

「篤く志す」をどう意識するか
と考えると、「篤志」を辞書で引いて
みましたら、「気の毒な人や不幸
な人に対する親切な志」とありま
した。そこで、「篤く志し」を「世
のため人のために志し」としまし
た。

儒学の基本は「修己治人」にあ
るといわれます。己を修め、世を
治め人々を幸せにするというこ
とです。孟子の言葉に「己を修め
る心在り、故に民を救うの心あり。
民を救うの心あり、故に己を修め

る心あり。」とあります。つまり、
己を修めることと、人々のために
生きることとは表裏一体だとい
うことです。

そう言えば、アメリカの第三十
五代大統領、ケネディーの就任演
説に、「諸君は国に何をしてもら
えるかではなく、国のために何が
できるかを問え」という有名な言
葉があります。この言葉を、オー
ストリアの精神科医フランク
ルは、言葉の意味によって、生の充
実を図る「ロゴセラピー」の精神
として高く評価しています。世の
ため人のためという篤いところ
ざしがあれば、その学びも切実で、
人生も生き生きしたものになる
ということですよ。

二宮尊徳翁の一生も常に世の
ため人のために生き、そのことを
弟子たちにも説きました。

二宮翁夜話に、こうあります。

予が歌に「かりの身を元のある
じに貸し渡し民安かれと願ふこ
の身ぞ」とある。それこの世は、
我れ人ともに、わずかの間の仮の
世なれば、この身は仮の身である
ことは明らかなり。元の主とは天
をいう。この仮の身をわが身と思
わず、生涯一途に世のため人のた
めのみを思い、国のため天下のた
めに益あることのみを勤め、一人
たりとも一家たりとも一村たり
とも、困窮から免れ富有になり、

土地開け、道橋整い、安穩に渡世のできるようにと、そのみをおこたらざるがわがこの身である、という心で詠めるなり。これが畢生(ひっせい)の覚悟なり。私の道を行わんとする者は知らずんばあるべからず。(二宮翁夜話巻一の十)

「畢生の覚悟」とは、生を終えるまでの間、生涯貫く覚悟ということ。

この文の前に「吾はじめて、小田原より下野の陣屋に至る。己が家を潰して、四千石の復興一途に身を委ねたり、これ即ちこの道理に基づける也」とあります。

まさに、尊徳翁は一途に世のため人のために生きた一生であったということ。

尊徳翁も勤勞、分度、推譲ということが人としての道であると説き、それが人々を幸せにすると教えています。前に引用した、尊徳翁が箱根湯本の旅館福住楼で湯に入りながら弟子たちに語った「湯船の説教」には、「此の湯船の湯をわが方へ掻けば、湯はわが方に来るようだが、湯は向こうへ流れて帰る。之を向こうに押せば、湯は向こうに行くようだが、またわが方へ流れ帰る。少し押せば少し帰り、大きく押せば大きく帰る。これが天理だ。仁とよい義という

のは、向こうに押す時の名である。我が方へ掻くときは不仁となり不義となる。慎まなければいけない。」とありました。

人は、つい何事も己の方へ掻きがちですが、人の方へ推す努力の必要性を学びます。

それにしても、私も含めて、戦後の日本人のほとんどは、無意識とは言え、世のため人のためより私のために生きることを当然としているのではないのでしょうか。

言うまでもなく、尊徳は言うだけでなく、実行を尊びました。『論語』述而篇二十四にもこうあります。

しよつ も おし ぶん こう
子、四を以つて教う。文・行・

ちゅう しん
忠・信。

先生は四つのことを教えられた。文を学ぶこと。行うこと。まごころを尽くすこと。うそ偽りのないこと。

「文」とは書物の事で、当時では『書経』や『詩経』などのことです。今でいえば詩文を通して言葉の力、表現力を身につけるといつてもいいかと思えます。それはまた人としての道に通ずるもので、それが身につけば確かな「人間力」が培われるものです。

「行」とは人の道の実践躬行(じせんきぎゆうこう)です。それと気づ

いたら直ぐ実行することです。

「忠」などという古い封建的な徳目のように思われがちですが、そうではありません。忠とは、真中の心「まごころ」を尽くすということ。

「信」とは口で言うこと行動することが一致しているということ、つまり、うそ偽りのない「まごころ」のことです。それが人からの信用や信頼を得るということです。この様に、孔子は人の心の在り方と、学んだことを実行することの大切さを常に説いています。

ところで今、東海地震の可能性が指摘され、いつ再び大地震が来るかわからぬ状態にあります。そこで言われるのが「備えあれば憂いなし」という言葉です。この言葉は実は、先ほど触れた当時の「文」つまり五経の一つ『書経』にある言葉です。まさにこの言葉は知っているだけでは意味をなしません。日ごろ、いざまさかの時に備えおく実行が求められます。

また先進篇六にこうあります。

なんよう はくけい さんぶく
南容、白圭を三復す。孔子、
そ あに こ もつ
其の兄の子を以てこれに妻わす。

南容は白圭の詩を何度も繰り返していた。そこで孔子はその兄さんの娘を妻わせられた。

「白圭の詩」とは『詩経』にある詩です。その詩にはこう有ります。「白い玉のきずはな磨くべし、ことばのきずは繕いもならず」と。「白圭の美玉はもしきずついても、これを磨いて元のように美しくすることはできる。しかし、人の言葉の過ちは、ひとたび口から出てしまえば、後から取り返すことが出来ない」という意味です。最近、前言を取り消すなどよく言われます。「綸言(りんげん)汗の如し」という言葉があります。かいた汗をもとに戻すことができないように、一度出した言葉はもとに戻すことはできないということ。「綸言」とは天子の言葉のことです。

ただ、ここでは南容がこの詩をいつも口ずさんでいたから兄の娘と結婚させたわけではありません。南容はいつもこの詩にあるように言葉を慎もうと実践している姿に、その人柄を見込んで兄の娘と結婚させたという事です。

この詩からも「文」を学びそれを「行」う、実践力を孔子は大切にしていくことが分かります。

実行の大切さをのべた、こういう章もあります。基本的な人としての在り方を述べた章です。学而篇六にこうあります。

しいわ ていし い すなわ こう
 子曰く、弟子、入りては 則ち孝、
 い すなわ てい つつし しん
 出でては 則ち弟、 謹みて信
 ひろ しゅう あい じん ちか
 あり、汎く衆を愛して仁に親
 おこな よりよくあ すなわ
 づき、 行いて余力有らば、 則
 もつ ぶん まな
 ち以て文を学ばん。

先生がおっしゃった。若者よ、
 家では親孝行、外では目上の人に
 素直に従う。言行をつつしみ、約
 束を守る。多くの人に愛の手を差
 しのべ、思いやりのある、まこと
 の人に親しみ学ぶ。そうしたこと
 を行った上で、まだゆとりがある
 なら、本から学ぶがいい。

この章では、孝や弟、謹みや信、
 人を愛することや仁徳ある人か
 ら学ぶことなど、人としてあるべ
 き大切な規範が述べられていま
 す。そうした事をしっかりと実践し、
 余力つまり余った時間があるな
 ら、本から学べという事です。
 本を学ぶ意義は、己を修め、世の
 ため人のために役立つ実践人に
 なるという事です。

ところで、二宮尊徳翁も常に実
 践の大切さを教えています。二宮
 先生語録巻一の七九にこうあり
 ます。

「私は幼い時から実行に努め

てきた。なぜなら、毎日行わなけ
 ればならぬことが沢山あったか
 らだ。水も汲まねばならぬ。庭も
 掃かねばならぬ。灯りもつけねば
 ならぬ。戸も開け閉めせねばなら
 ぬ。そのほか行わなければならぬ
 ことがどれくらいあつたらう。孔
 子は『行いて余力あれば則ち以て
 文を学ぶ』と言った。私はもとよ
 り学問が好きであつたが、少年の
 時に孤児となつて親類の家に寄
 食し、日夜苦使するところとなり、
 少しも余力というものがなかつ
 た。それでも、昼飯の時、人は湯
 を沸かして茶を入れたが、自分は
 冷や飯に水を飲んで、その暇に大
 学を読んだ。あるときは柴かりの
 道で読誦し、あるときは耕作の暇
 に読み、あるときは人が寝静まつ
 てから読み、四書を一通り習うこ
 とができた。その中で分かつたこ
 とは、一字一句と謂えども、終身
 之を実行に移そうと思つても、実
 行尽くせないということである。
 今の儒者は千巻万巻をあさり読
 んでいるが、どうやってそれを実
 行するつもりであるうか。行わな
 ければそれを読まぬと同じであ
 る。誠に、実行がすたれてから久
 しいものである。」

この語録からも、尊徳翁は子供
 の頃から、寸暇を惜しんで、論語・
 大学・中庸・孟子などの四書を学
 んだこと。そして、それを常に実
 行に移すことを考えていたこと

がよく分かります。(つづく)

講演会「二宮金次郎(尊徳)と『論語』開催のお知らせ

郷土の偉人尊徳翁が、子供の頃学んだ『論語』をどう実践に生かしたか。本誌連載の内容を中心にした講演会が以下のように開催されます。

講師：岩越 豊雄 氏

日時：平成30年9月2日(日)午後5時30分～7時30分(開場5時)

場所：小田原市民交流センター(UMECO) 第1, 2会議室

主催：小田原の文化と教育を語る会(代表・岩越豊雄)

後援：小田原市教育委員会、小田原報徳実践会、西さがみ文化フォーラム

申込先：☎0465-47-9337(岩越)

会費：500円(資料代含む)

新会員紹介

名前(敬称略)	住所
黒川 行修	湯河原町吉浜
天野 悦子	小田原市飯田岡
橋本 勝博	小田原市南町
林 克己	小田原市鴨宮
吉田 正通	南足柄市塚原

会員の方へのお願い

— 新会員募集 —

小田原史談会では常時新会員を募
 集しております。郷土の歴史に興味を
 お持ちの方にぜひ会員になっていただ
 くよう、お誘いください。申し込みは
 史談会役員または左記へ連絡願いま
 す。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三一一・五
 電話 ○四六五・三七・七一八八
 植田 士郎



「眼」としての光学ガラス

荒河 純

富士フィルム草創記(四) 小田原工場編その二

はじめに

先号では、昭和十三年(一九三八)、浅野修一社長はレンズの素材からカメラ製造に至るまでの一貫生産を企図し、小田原工場に光学ガラスの生産から始める決断をしたことを述べた。

当時わが国における光学ガラスの製造は、民間ではわずかに日本光学と小原光学の二社のみで、光学ガラスの需要に対して多くを輸入に依存している状態であった。

小田原工場での光学ガラスの生産開始に当たっては、わが国随一の権威者である大阪工業試験所・高松亨博士の技術指導を受けることでやつと実現した。

しかし間もなく太平洋戦争に突入、光学ガラスは国家の存亡



高松亨博士胸像

を決すべき戦争の『眼』と見做され、重要軍需物資としての役割を担うことになるのである。

軍需品としての光学ガラス

昭和十五年(一九四〇)三月、小田原工場に光学ガラス工場が完成、翌四月には、大阪工業試験所で研究を続けていた三宅源一郎(後に小田原工場長)らが帰任して溶融作業を開始した。しかし、当初は試験溶融の域を出なかった。毎月一、二回大阪工業試験所から高松亨博士を小田原工場に迎え、指導を仰ぎながら工程の改良に努め、同年末までに十数種の光学ガラスの製造に成功した。

折からの国際情勢のもとで、わが国における光学兵器の国産体制の確立が強く要望され、これに伴って光学ガラスの需要も増加していった。富士フィルムとしては、当初高級カメラ用レンズの生産を企図していた。しかし、光学ガラスの製造化に成功した時期が戦時体制の進展と重なったため、ほぼ全ての光学

ガラスが双眼鏡などの軍需用に充てられることになったのである。そこでは、光学性能の向上による量の確保が最優先された。

軍需用の光学ガラス増産要請はもちろん富士フィルムだけではなかった。日本光学、小原光学、大阪工業試験所に大規模な新規工場が増設され、小西六(現コニカミノルタ)、保谷硝子もガラス工場を新設した。こうして日米開戦前夜、富士フィルムも含めて、一斉に光学ガラスの増産をおこなったのである。

日本光学の前身である藤井レンズ製造所を創立した藤井光蔵は、光学兵器の重要性和軍需用レンズの莫大な使用量について次のように述べている。

それは大正三年(一九一四)突如として第一次欧州戦争が勃発したことである。言うまでもなく光学硝子が条件付き戦時禁制品であることは平素よりよく判っていた事柄であるに拘わらず、仏国を除く世界各国の殆ど凡てが、その供給を主として独逸ショット工場に仰いでいた。否、仰がなければならぬ様に仕向けられていた実状から言うところ、全く独逸の遠大なる世界制圧の野望に安閑として乗せられていたとも言えるのである。(中略)そして、兵員百万人に要する光学兵器は、双眼鏡六万個ないし七万個、照準およ

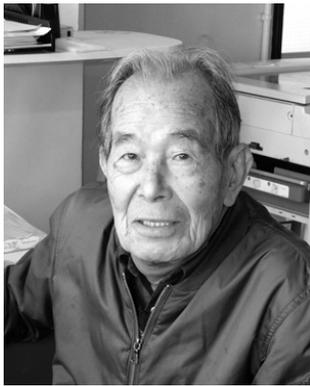
び観測望遠鏡類二十五万個、距離測定器一万個は直接戦闘に用である。その他、測量機、信号機、回光通信機の多数、殊に大口径写真レンズの需要が多く、(中略)其の他戦闘に直接関係のない精密検査の光学器械の需要も莫大で、従来の製造規模では到底間に合わず、何れも大拡張、新設若しくは他より転業したものが少なくない。予の知っている範囲でも、それら工場中、一ヶ月のレンズ製造個数八万個以上、又中規模の工場に二トン以上の光学硝子を消費するものが少なくなかった。(『光友』昭和十七年十月号より)

草創期のガラス部

昭和十六年に小田原工場に入社し、すぐにガラス生産工場で働きはじめた石井磯吉さんに初期の小田原工場とガラス部の思い出を語っていただいた。石井さんは現在、ガラス部OB会である「光陸会」の会長である。

昭和十四年より前に先に精機部ができた。それからガラスをやるというので、昭和十四年二月に三宅さんが大阪工業試験所に行き、一年行つて戻つてこられた。その後、大阪から高松先生もかなり来ている。ガラスの製造は昭和十六年頃から始まった。

当時は国際関係も揉めていて、国際連盟も脱退した頃だった。軍



石井磯吉さん

人出身の新木さんが工場長だった。その項軍の指令で青年学校ができて、従業員は皆青年学校に入った。箱根山で合宿もやった。教師として位の上の将校が来ていた。職場にもサーベルをさした配属将校がいた。青年学校は仕事を中心で、休みの日に軍人が来て全員集められる。先ず朝から体操を行い、それから軍事教練、竹槍の訓練もあつた。三年間あつた。

戦時中の大きな出来事としては、昭和二十年八月三日と十三日に小田原工場は空襲にやられたこと。ボイラーを狙った弾がたまたま稲荷神社の前の側溝に落ち、たまたまそこへ逃げていた者に当たつた。軍医が脚をつないだことを覚えてる。

戦後は昭和二十一年に生産が再開され、間もなく組合が出来た。富士の中では一番早かった。新製品の生産拠点が新設されると、小田原からの従業員の集団異動が必要となり、組合の対応も頻発した。

昭和二十八年にはレンズの名前が社内でも懸賞公募されて大いに盛り上がり、「フジノン」に決まった。この頃は愉快なことがたくさんあつた。光学ガラスは元々ドイツのシヨットの技術。鉛系、バリウム系など戦前は技術的にはあまり差が無かつた。照準、双眼鏡など軍需用は色収差関係ないからほとんど古いタイプものだつた。作り方も溶融は粘土製の坩堝(るつぼ)だつた。

それが一九三九年にライカとシヨットがランタン系などの新種ガラスを開発した。カラー化が必要になつた。うちが始めたのは戦後の昭和二十二年(一九四七年)頃。この頃は、ガラスの性能、レンズの性能でしぎを削つた。さらに昭和二十八年にはレンズ設計のために、自分でコンピュータを作つた。わが国初ですよ。真空管式のもの。

当時のレンズは自動設計ではなく人が計算していた。女性の計算士が二人組で対数表などを見ながら計算して、二人が同じ答えを出したらOKで、一つのレンズが完成するまでに半年以上かかるのが普通だつた。昭和三十年代まではどのカメラ・レンズ会社にも女性の計算士の方が大会社では何百人単位でいましたよ。

カラー化を支えた光学ガラス
昭和四十六年に入社、ガラス部の終焉を看取つた、神山宏二さんに戦後の光学ガラスの推移について語っていただいた。



神山宏二さん

昭和三十年代後半には技術は頭打ちになる。ガラスの性能ではあまり変わるものが出来ない。コスト競争に入つていた。最後は昭和四十九年、私たちが色収差を大幅に改良したレンズを作つたが、それで性能改良は完全に終わった。

ニコンは自前、キャノンは小原光学、富士は自分のところの他にマミヤやオリンパスにも売つた。それでも量的には少なかつた。

入社以来ずっとコストダウンの仕事でしたね。三交代をなくした。夜間連続炉を作つた。工場近くに住んで呼び出しがあつても直ぐ行くようにした。そのうち夜間無人運転の溶解装置も作つたけど、それでも採算が合わなかつた。

昭和三十八年には「ヒートロン」という耐熱ガラスを始めた。光学ガラスの製造が減少するなかで、結晶性ガラスがいろいろ使えるのではないかと。

耐熱ガラスとしての性能は良かった。でも、何に使うか? 鍋、ストーブ、焼き鳥用コンロ等。富士フ

ルムの事業領域に入っていない。結局、昭和四十六年十月に「ヒートロン」の事業は他社に譲渡した。

ずっと赤字続きだったが、戦前からの歴史ある事業はなかなか潰せない。技術は残すことが経営会議で決まつた。特殊な最先端の光学ガラス技術のみを住田光学に移管した。

こうして、ガラス部は昭和五十六年に終焉を迎えた。

(平成二十九年三月五日、栄町「神山洋介事務所」にて聞き取り)

おわりに

私事になるが、私は昭和四十五年に富士フイルムに入社した際の配属希望は、実はガラス部だつた。「ヒートロン」のような耐熱ガラスの仕事がしたかつたからである。でも配属は別な部署であつた、その当時は「何で?」と思つていたが、今では納得している。私の性格上、敗戦処理のような仕事には全く不向きだつたと思うからである。

しかし、本稿を執筆するにあたり、富士フイルムの事業の中でも特に異彩を放つたガラス事業を取り上げてみたかつた。それは、二十歳そこそこの頃の情熱を懐かしむノスタルジーなのかもしれない。

片岡日記 昭和編(十三)

片岡 永左衛門

昭和三年八月

十七日 晴

午前九時二十分発にて関東貯蓄銀行重役会にて
関東興信銀行に至る。貯蓄銀行ハ一昨年満期ニ
テ解散セしも、関東銀行ニ預金とせし三十万円
ハ同行整理の爲、切捨額十三万八千(全)ノ不
足トナリ重役ノ負担として整理ハ一段落となり
しに、関東興信銀行ト関東銀行を合併して、関
東銀行を解散の準備として十三万円の元金ハ
種々の方法ニ依り数年の後ハ消却の見込にて連
帯にて借用出来得るも、差当り年六分ノ利子仕
払(支払)ノ必用(必要)有り。本日協議ノ結果、
重役全員十三名ニテ分担となり、覚書ニ調印の
場合となり、拙者ハ負担なすと雖も出金の目途
有らされは三贅舜太郎、三橋善吉両氏ニ調印不
承諾之懇談なせしニ、如何になすも無き者の出
し様なく、結局其の分ハ他の担保提出者の自然
負担ニ帰す可きも、今彼は申立れば他ニ影響な
すに付、兎ニ角調印せられ度、元金の時ニも貴
殿の担保提出ハ自然ニ免除と成り居れハ、利金
ハ自然の結果として出金難なきハ止を得不得との
事にて調印したり。後日之為記載す。但し落合
三雄氏も拙者と同格にて調印せり。
藤沢四時半発にて熱海野田氏ニ至り、九時二十
分発ニテ帰宅。

十八日 時々雨

先日来快晴となりしニ又不良、今日ハむし暑し。

むし暑くおもき心もひとしきり

洗ひてすくる夕立の雨

当旧城跡城堀を埋立て高女、高小両学校建築問
題ハ、其後引続き返(反)対同盟側も種々運動せ
し処、前途の見込も付さるに県庁よりハ見くひ
られ、今回新ニ正式ニ県庁より城内ニ学校建築
ノ諮問ヲ発したるに、返対同盟ハ其決議を区長
より町会ニ向て請願せしめしニ、町役場ニ於て
ハ同盟側の不結束を見透し、区長を個々に呼寄
せ懇談せしに、答辞区々にて一致ニ非るを機と
し諮問案を可決したれば、同盟側ハ町本意にて
是迄種々運動せしも町会ニ於ハ誠意ナク町民の
意志ニ添ふ意志無きを認めたれば、同盟会とし
てハ総てを打切、解散を表明し解散したり。斯
く俄ニ解散したるハ、同盟側ニも近來穩健と強
剛の二派を生し、強派ニハ離本の気分も露骨と
なり穩健派の厭ふ処となり一夜ノ内ニ解散を決
したるも、元來快決(解決)したるに非されハ此
儘ニ終結するや、又是を因として種々の紛議を
形式を変て生るやは逆睹し難し。元來城堀問題
ハ其物カ小供(子供)の喧嘩に過ぎざるも、遠因
ハ町民の現町議や近來の町当局を信用せる(ママ)
に胚胎したるにて困たものなり。

十九日 大雨

昨夜より近來希なる大雨、午后より時々小ふり。

電燈の光りも消てくらき夜を

おそろしきまで雨の音する

廿日 晴

午后、石黒氏小供年回仏事に行く。漁業者ハ長
時化に(ママ)にて盆以來此の三十三日間に終に
七日間斗りの漁業ニ加るに、六月以來天候は勿
論漁獲も僅少にて鍋釜迄も質屋ニ入れし者あり
と、漁業者の鍋釜も質屋ニ入ると云事、小供時代
より聞伝たるも此三、四十年ハ聞及さる事にて
よくの事なり。

廿一日 晴

有浦文書実査之件ニ帝大史料編纂より来状ニ付、
有浦ニ面会す。

中学校より帰途すつほん池の蓮葉を見て

長雨に風にもやれす蓮すはの

いろすかしくし森かけの池

廿二日 晴

町議打揃、城堀問題ニ付謝礼ニ来る。六時、国
府津長谷川御淘席ニ出席、十時帰宅。

不漁の原因ニ就ハ、今度小田原近海ハ不可解ニ
テ、寒流以外ニ見ざる白鯨カ真鶴にて捕獲され
間も無く暖流に住むタイマ(タイマイ)と称する
大亀カ又同網に入り、六、七月かけ、まぐろカ
豊漁ハ未曾有にて、其後潮流カ変化し水面ハ西
に流れ五尋以下ハ東流、昨今ハ五十尋の水深で
三重ニ変て、まぐろも相当入込居るも、潮流
の關係で不漁である。

廿三日 時々雨

廿四日 曇

廿五日 曇

廿六日 曇

親一、大坂行之途立寄、淳子、加奈子兩人と箱
根ニ行。佐生新夫婦来る。午后九時、親一大坂
ニ出立。

廿七日 曇

午后より一藤木淘席。細君、堀江ニ診察ニ行く。
先回よりよろしきよし。

廿八日 曇

廿九日 晴
親一、大坂より帰途、国府津にて面会。

三十日 晴

三十一日 晴

高長寺、高橋子供の告別二行く。

葛の花まとひて咲ける杉の木(ママ)の
梢をたかくせみのなくなり

昭和三年九月

一日

午前墓参す。十一時四十五分町民一同黙禱。古
屋喜代子様より草花を贈らる。懇意の人二あら
ざるも、毎年相不変今日贈らる。夕刻答礼二行
く。

花におく露の命のひと、きも
残れはなかし人のこゝろに

今日は昼夜暑気甚たし。

二日 晴

親一墓参ニ来る。淳子午后一時全行帰京。

兼約ニ依り帝大史料編纂官補相田、橋村両氏来
訪。鈕持氏ニ至り、所蔵の文書足利義詮北条虎
の印文書見る。夫より有浦氏ニ至り同家の文書
を見る。先年より史料より之依頼にて交渉セシ
モ、震災以後にて鍵の紛失、種々の故障ニテ漸
二本日ニ至る。

三日

四日 晴

午后より一藤木洵席。帰途有浦氏より借用の書
物返却す。

五日 晴
加奈子帰京。

六日 晴

大磯岸岡様洵席。本日、足柄史料製本、村松よ
り送付し来る。

八日 晴

午前、高田尋子来る。

十二時発にて上京、親一方ニ立寄り浜町より電
車、品川にて乗替、鈴ヶ森にて下車。初てにて
諸々にて聞き、樋田(樋畑)雪湖君を訪問、幸
ニ在宿ニテ足柄史料老冊を贈り駅伝の件ニて暫
く談話、途中迄て樋畑君ニ送られ大森ニ出しか、
常にハ大森駅よりなるに、今回ハ大井町より
て道に迷ひしニ、幸ニ人力車ノ来りたるに乗り
徳富邸ニ至れハ、先生は未夕新聞社より帰宅な
く静子婦人出迎られ、応接間ニ入は、今年ハ雨
多にて、先日主人と箱根に参りました、天気よ
くは御通知致すつもりか毎日〳〵の雨にてふり
籠られました、夕刊の評論も止めましたか読者
より郵便、電報てやかましく申て来ましたので、
又書く事となりましたとの談話中、先生の帰ら
れ婦人と入り替りに入り来られ、無沙汰を詫ひ、
足柄史料を差し出せしニ、先生よろこばれ、談
ハ又雨に及び、箱根より使を出すつもり、
是も雨にて流れて閉口しました、評論も社の若
ひ者か何か申のて止ましたか、毎日、新聞か二、
三千つ、減るので青くなつて申て来ましたので、
又近日より書ますと、に〳〵談話せられたか、
其修刊は左之通て有たから、に〳〵も思れる。

「昭和三年九月二日夕刊

読者諸君各位

蘇峰正

国民新聞夕刊の毎号ニ瓦礫の閑文字を並へて読

者諸君各位ヲ煩はしたるは今更心外千万た。然
るニ今度編輯上の都合にて之を打切ること、な
つたから、一言此ニ告別の辞を陳へて置く。

予か毎号病中ても旅行中ても国民新聞夕刊ニ書
くことは、元来予か書くことか好きだからたと
云ふはかりてなく、大正十二年九月大震災に
際して、凡有る新聞社の中に最大打撃を被り
たる中の最一なる国民新聞の復興に聊かたりと
も貢献せんか為めてあつた。世間の或る人達は
是れを遊戯的とへつ(蔑)過せられたるやも知ら
されと、予自身にハ一種の筋肉労働の心地もて
丹誠を抽んでたのであつた。此ハ心ある愛読者
諸彦の必ず諒とせられた所であらふ。

新聞の要は、其多方面と多角的とにある。新聞
だから其日〳〵の出来事を掲ぐれば足れりと云
ふは、全く新聞の性質を解しない没分曉漢の見
た記者の少年時代には、朝野新聞には成嶋柳北
の雑録があつた。報知新聞には栗本鋤雲の漫録
かあつた。現時の「サンデー・タイムス」の如き
も毎号必らずコース翁の新刊書批評とオコンノ
ア翁の随筆とを掲げてゐる。

予の夕刊の小文は、文学的価値に於てとても斯
る諸名家の作に伍する程のものではなかつたか
少くとも其取扱うたる範囲は、如上の諸名家の
それよりも普遍であり、且広汎であつた。
予ハ頑鈍の質とても、倦むとか飽くとか云ふこ
とを解しない。それは決して予自から退屈して
打切りたるてはない位だ。
此際は兎も角も足掛け六個年に亘りて枯木も山
の賑を為すの役目を果し得たることを欣幸とす
る。」

六時頃に辞し、大森停車場より乗車、親一方ニ
帰宿すれば、龍夫ハ小畔君とアルフス行にて入
替りに是もに〳〵と出立した。

九日 晴

午前、宮相一木私邸ニ至る。幸、在邸にて久々にて面会。御夫婦にて種々談話。足柄史料を贈り、猶宮内省文庫ニ献納し、談話も有り。暫くして辞去し、原町ニ沼田頼輔氏ニ至れば、是も在宿にて、種々引留られしも足柄史料を贈りて帰る。

午後、高輪南町北白川宮邸ニ至れば、幸二旧知田辺正之助氏在邸にて、武田(竹田)宮両大妃殿下ニ足柄史料の献上を申入る。目下軽井沢ニ御避暑中ニ付、御帰邸の上ニ御披露を願事として寄宿す。今日ハ珍しく親一も午后より在宿。

十日 晴

帝大史料編纂掛新館ニ相田二郎君を訪問。相模文書之件ニテ談話し、足柄史料を贈り、親一方ニ立寄り、一時發に帰宅。

十一日 晴

吉田義之病氣見舞二行。

十二日 晴

本年ハ、七、八ノ両月雨多く、稲作不良なりしニ、秋暑甚しく、作柄昨今ハ見直したり。

十三日 晴

牧野勝從、昨十二日、東京にて死亡。来る十六日大蓮寺ニテ告別の通知有り。氏ハ小田原藩士ニテ明治二十(二十二年)町村制施行当時ハ町の助役を勤務ナセリ。

十四日 晴

重富氏其他ニ史料配本す。

十五日 晴

午后より国府津洵席。

十六日 晴

午前九時發にて上京、親一方ニ立寄、午后徳富万熊紀念講演參聽、帰途親一方ニ立寄、九時半帰宅。

十七日 時々雨

今井より吉田ニ廻り、十二時帰宅。

十八日 雨

一昨日迄の残暑甚しきニ引變り、昨午后より俄ニ冷氣。

十九日 晴

廿日 晴

廿一日 晴

道の辺の並木のさくら葉のちりて
うらさひしくも秋風のふく

午后国府津洵席、十時帰宅。

廿二日 晴

廿三日 晴

道徳会先亡諸氏追弔回向ニ參拜。
如雲先生より足柄史料の礼状来る。

廿四日 晴

靖国神社加藤宮司より、足柄史料之礼状来る。

廿六日 雨

草山淳造、尾崎亮司と三人弁当持參、木賀ニ静養ノ留岡幸助氏を見舞。殆と全治トノ事。二時帰宅。

廿七日 晴

午前十時より一藤木洵席。

廿八日 晴

近頃、策者之思付にて、生木の楠ニ大黒天を彫刻し、福興大黒天神ト号し參拜ヲ始メ講中も募り始タルニ、信者ニ參拜せしむるにハ其手續き設備ニ不完全トカにて參拜を差止られしに、神道修成派金幣祠出張所之看板を掛、衆諸(衆庶)ニ參拜せしめ来りたるに、今回又々地所建物も式拾万円とかに売渡し、買受し者ハ遊園地ニなすとかにて其整理中、昨日より又參拜を禁したり。大黒を祭り金幣祠トハ工夫したもの。

望月の今宵を祭る代にとか

尾花手折て子らのもちゆく

今日之所見 空曇りて月影淡しければ

虫もまたこかれて鳴か草の上に

今宵を待し空の曇れは

廿九日 曇

午前七時發ニテ上京、吉川先生二十年祭ニ參列。洵席皆伝会了し、六時半親一方ニ止宿。

三十日 雨

十時發、十二時帰宅。
今日之新聞ニ小田原名所八幡山福興大黒神社ハ一両日前十五万円ノ債権者勸業銀行カラ一切ヲ差押らる。此大黒神社ハ瀬戸鶴吉氏か或夜ノ夢に因り八幡山に大黒天を祭り、同御料地ヲ払下、大楠ヲ伐テ生木のま、大黒天を彫刻したるに、瀬戸氏ハ中途ニ死亡し、爾来関係者一同種々尽力したるも、大楠ニまつはる不詳の流説さへ伝はつて、一向參拜人もなく、十五万余円の債務返済する不能、差押へられたる次第である。

(注)この大黒天は現在板橋の地藏尊境内に安置されている

(つづく)

史談再録
(史談会報・第四号、第五号、第七号より転載)

風外上人と定光院の末路

穂坂辰巳

明治初年まで小田原市上曾我村竹の内に上郡飯沢の金剛院の触下天台宗の定光院と云う寺号の寺があった。此の寺に寛永の初年行雲流水風の赴くままに雲行した上野碓氷郡土塩村の高僧風外上人が此の地に杖を止め此の定光院に仮住したと推定した。

定光院は曾我山丘の繁茂する蜜柑林の裾にありて、現今は此の寺の跡を始め附近に農家が散在して居る。

上人は此の寺に住んだが「座臥寸心間」(ママ)「六窓深困」(ママ)意の如くならぬ故、二百米はなれた西方にある古墳址の横穴に「応接不暇」(ママ)ひそかに穴居した。此の横穴は入口四尺、奥行三間半、高さの高き部分は七尺、奥は一段高く床面が二尺高くなっている。床の高き所に円相の風外上人寿塔下の段の左に寄進者の碑、右の碑に父母の碑があつて側面に寛永五季成辰八月吉日と明記さる。上人は此の穴に何年か住んだが、其の徳望を慕い来る者、益々多き

をなげき、遂に真鶴の岩窟に通れたのである。此の穴は私より以前に既に難波明先生が発見して居られた事を後日知った。風外上人の調査研究家、上野の博物館の竹内尚次先生を昨年の五月案内した。先生の技術的の(ママ)拓本に依つて三個の自然石に刻銘した記録が明白になった。

此の刻銘の文字はずべて専門家に任かすとするか、田島村の穴は現実別に立証する何物もない様であるが上曾我の岩窟の方が風外棲止の跡を実証するに明確な根拠であると竹内先生が悦んだ。さて主題の定光院であるが現今は、其の跡へ民家があつて仮住したと思ふ証拠は何物もないが、たゞ土地の長老の人が「風げい屋敷」と呼んでいたと云う丈の事で定光院に始めは住んだと推定されるのである。

上人の事は専門家に任かすとして主題の定光院の末路を茲に託したいと思ふ。以下の記録は曾我谷津大光院の寺室として院主の神保行恵氏が保管して置く。

以下原文のまゝ、
上曾我定光院、不動明王、曾我谷津大光院に納めるの由来。
不動尊、木立像御丈一尺六寸
矜迦羅童子、木立像御丈九寸五分
制託迦童子木立像御丈九寸
厨子共に当院に納める者也

一、抑々此の本尊儀、山城国京部当山修験三宝院宮末相模国足柄上郡上曾我竹の内久保、定光院の本尊に候右同院永らく無住寺にて院内大破に及候処、同久保三嶋神社の社え入置候、明治元二丑年より御一新に付き神仏混合の御引別となり、亦々同久保千体堂へ置入候え共、各堂も廢堂となり村の学校となり、其の為入置きがたき故舞戸久保大仙竺土寺に頼み右寺の境内の保命大権現の社へ置入候え共小僧大いに戒められ九本尊あはれ申し候、寺の住職村役場え参りつ

ぶさに語り本尊を置入る事を断り致し候、村役場の取りあつかう所ではないと断り申候、其の後村の方を相談いたし候、村方の者の内曾我谷津大光院の信者の者ありて大光院に参り願いに付き引取る事に致し候、明治十二己卯年新曆正月二十七日大光院より富士講の者又は信心の者伺いに参り引取り申し候

誠に手入れ無く破れ致置候故、御本尊皆くづれ居候、其の時、上曾我より修理彩色料灯明料として金五円納申候故、小田原高梨町仏師宮田藤五郎に頼み取りつくろわせ候、上曾我村より小本尊送りのく六人程当院に参り、新曆正月二十七日旧曆正月六日に当り開眼、新曆三月十八日旧曆二月二十六日に当るなり。追記不動尊出伺いの人、

大光院側十名、定光院側送りの人五名右の氏名も列記してあるも略す。

いづれにしても定光院と風外上人とは関係があつたと推定し合せて定光院の末路を託した次第である。(終)

(参考)

『新編相模風土記稿』の記載

○金剛院(飯沢村)

箱根山と号す、三世正宝院の時より箱根権現の神事に預かれり、故にこの号あり、当山修験勢州山田世儀寺配下、開山正宝、嘉永二年二月十五日寂す、本尊不動を安す、近村十箇寺の触元を奉はる、

○常光院(上曾我村)

当山修験、飯沢村金剛院触下、不動を本尊とす、

○大光院(曾我谷津村)

本山修験、小田原玉瀧坊触下、諸法山実相寺と号す、本尊不動、弘法大師作、吉野不動を腹籠とす、按ずるに、村民八郎左衛門が家系に、此像は先祖曾我左馬介祐氏が守本尊なりしを、文明十八年当院を創建せし時納むと載す、されど当寺には伝えざる事なり、中興開山恵応、永祿元年三月二十八日卒、

平成30年

総会報告

日時：平成30年5月26日(土)13時-14時

場所：小田原お堀端コンベンションホール(ジャンボーナックビル5階)

司会 鳥居泰一郎(史談会理事) 議長 田中 豊(史談会理事) 書記 青木良一(史談会理事)

議事次第：

第1号議案 平成29年度事業報告

1.一般事業報告

- ・平成29年度事業計画に沿った活動を実施した。
会報「小田原史談」を年間4回定期発行、「史跡巡りの旅」を年2回実施した。
- ・今年度は歴史講座「小田原史談会セミナー」を休止したが、30年度より再開すべく準備を進めた。
- ・定例理事会を毎月開催、事業計画の実施状況を点検し、新たな実施計画等を検討した。毎回議事終了後勉強会を実施した。

関係団体との交流・他

- ・「おだわら市民交流センター(UMECO)」に登録し、各種講演会、理事会その他の行事を行った。
- ・「北条氏政、氏照公墓前祭」に参加した。
- ・「小田原・足柄の歴史団体交流会 合同展示会(平成30年6月開催予定)」内容立案、準備作業を実施。
- ・小田原市文化連盟の行事に積極的に参加した。

2.事業委員会報告

(1) 広報委員会

- ・会報「小田原史談」4回発行
第249号(28頁)平成29年4月「一本釣り漁師 善さんのひとり語り」など
第250号(28頁)平成29年7月「後北条以前の小田原(上)」など
第251号(32頁)平成29年10月「多古の牛乳さん」など
第252号(28頁)平成30年1月「小田原紡織と神原富文」など
- ・会員参加プロジェクト(井細田・多古地域の歴史、大森氏勉強会)を通じて、史料や記憶を掘り起こし記事のかたちにするを行った。
- ・ホームページを随時更新

(2) 研修委員会

- ・総会講演会 平成29年5月6日(土) 参加者—多数
演題「後北条以前の小田原—政治・社会状況からみる鎌倉・室町時代の小田原地域—」
講師 野村朋弘氏(京都造形芸術大学准教授)
- ・史跡めぐり「北条氏ゆかりの城跡めぐり(静岡東部編)」平成29年10月24日(火) 参加者—39名
- ・「富士山本宮浅間大社・久能山東照宮初詣」平成30年1月16日(火) 参加者—37名
- ・片岡永左衛門日記の輪読(昭和4年～)月1回
- ・多古井細田地区を対象に会員参加による歴史探訪実施
- ・大森氏勉強会の実施

第2号議案 平成29年度一般会計報告(別掲)、特別会計報告並びに監査報告

第3号議案 平成30年度事業方針

1.基本方針

- ・会員、「小田原・足柄地区の歴史研究団体」他と交流を強化する。
- ・会理事自ら学び、会員・非会員にも参加を呼びかける。
- ・残された貴重な資料・記憶を掘り起こし、記録し、後世に残していく。
- ・「史談会セミナー」を再開する。
- ・会員の高齢化に伴う会員の漸減傾向に対応するとともに、運営経費の節減・合理的運用に努める。

2.各事業委員会の活動計画

(1) 広報委員会

- ・会報「小田原史談」の定期発行(年4回)内容を充実させるとともに、親しみやすい紙面作りを目指す。
本年度は戦後の学制改革により誕生した新制中学の混乱と奮闘を取り上げる。
- ・PDF化された既刊号記事の活用を検討する
- ・井細田・多古地域の歴史、大森氏勉強会等会員参加プロジェクトを活用して、埋もれた史料や記憶の発掘、公表を行っていく。
- ・ホームページの充実と活用を図る。

(2) 研修委員会

- ・ 総会講演会 平成30年5月26日(土)
演題「伊豆と北条水軍 一梶原海賊と安宅船」
講師 鈴木 裕篤 氏 (沼津市歴史民俗資料館館長)
- ・ 史跡めぐり 「北条氏ゆかりの城跡巡り(伊豆編)」
平成30年7月3日(火)
- ・ 初詣 平成31年1月(場所未定)
- ・ 理事研修 『片岡永左衛門日記』の輪読
- ・ 会員参加によるプロジェクト活動
 - ・ 小田原市内を対象に会員参加による歴史探訪
 - ・ 大森氏勉強会
- ・ 史談会セミナー開催
 - ・ 「小田原市の最近の発掘状況(仮)」
(平成30年8月開催)
 - ・ 「小田原地方の民俗衣裳の変遷(仮)」
(平成30年11月)
 - ・ 「富士山と酒匂川(仮)」
(平成31年2月)

第4号議案 平成30年度一般会計予算(省略)

第2号議案 平成29年度 一般会計決算報告

収入の部				
項目	H29年度予算額	H29年度実績額	実績-予算	摘要
前年度繰越金	351,121	351,121	0	28年度繰越金
会費	801,000	705,000	-96,000	会費収入 (@3,000X235)
賛助会費	250,000	210,000	-40,000	賛助会員年会費 (@10,000 X 21)
雑収入	1,000	2,103	1,103	「会報売上」、「寄付金」、「預金利息」
繰入金	170,000	0	-170,000	特別会計 繰入
計	1,573,121	1,268,224	-304,897	
支出の部				
項目	H29年度予算額	H29年度実績額	予算-実績	摘要
総会費	50,000	48,655	1,345	29年度 定期総会 資料・講演会等諸費用
会議費	30,000	40,583	-10,583	理事会開催諸費用
通信費	20,000	2,783	17,217	諸会議招集通知等 郵送費用
会報発送費	70,000	56,993	13,007	会報「小田原史談」会員宛発送郵送料
交際費	40,000	17,080	22,920	関係諸団体会費、慶弔費、ほか
事務消耗品費	35,000	33,444	1,556	事務用消耗品(用紙代 その他)
振込手数料	15,000	10,898	4,102	会費等郵便振込 手数料
印刷費	20,000	4,220	15,780	諸会議資料・アンケート等 印刷費
HP管理費	3,000	3,000	0	ホームページ維持・管理費
会報印刷費	740,000	706,322	33,678	会報「小田原史談」印刷費 ㈱アルファ
委員会費	0	0	0	支出実績なし
ロッカー借用代	12,000	9,600	2,400	UMECO ロッカー借用代(2台)
会場費	60,000	18,960	41,040	理事会等会議室借用代 UMECO
予備費	308,121	40,300	267,821	既刊史談会PDF化事業費等
繰入金	170,000	0	170,000	繰入せず
計	1,573,121	992,838	580,283	

収入 1,268,224
 支出 992,838
 残高 275,386

監査報告

会計監査の結果、一般会計、特別会計ともに帳簿の処理、領収書・証憑の管理など、適切に処理されていたことを報告します。

平成30年4月5日 会計監査 佐久間 俊治 ㊟
 会計監査 石井 艶子 ㊟

上記の通り平成29年度一般会計の収支決算を報告いたします。
 残高 275,386 円は、平成30年度一般会計予算に組入れます。
 平成30年3月31日

担当理事 平倉 正 ㊟

小田原史談会セミナー予告

小田原史談会セミナー再開!

演題：平成28年度発掘調査の記録 -小田原城と千代台地を中心として-
講師：山口 剛志 氏 (小田原市文化部文化財課 副課長)
日時：平成30年8月19日(日) 午後2時~4時
場所：小田原市民交流センター (UMECO) 第4会議室
申込先：☎ 0465-33-1890 小田原市生涯学習センターけやきの会
 (7月16日より申し込み開始)
定員・費用：40名 無料 (ただし非会員は500円)
お問い合わせ先：松島 ☎ 090-6938-3796

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

税理士法人 **報徳会計**

伊勢治書店

 **かまぼこ**

(株) **オクツ薬局**

 **小田原ガス**

小田原報徳自動車

かまぼこ籠 **清**

かみやま小児科クリニック

興電社

COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

手打きとん小田原城趾前 **田毎**

(株) **アルファ**

のれんと味 **交る後**

ちんぎう本店

割烹料理 **鳥かつ楼**
うなぎ

和菓子 菜の花

杉崎茂法律事務所

平井書店

 **鮑屋**
株式会社

株式会社 **報徳**

建築金物 (株) **星崎仲吉商店**
家庭金物

学生専科  **マルク**

曾我の梅干 **美の政**
塩辛・かまぼこ

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替
年会費 普通会員三千円
〇〇二〇二六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

▼古稀のタイミンクで、郷里(境港)の小学校の同窓会案内が届いた。クラス五十名中七名が既に故人となっているのはショックであった。それはさておき、名簿の中に、在日朝鮮人のKさんの名前があった。Kさんの他にも二名居たはずだが、卒業前に帰還したのだろう。Kさんは席も隣で、三つ編みがよく似合う可愛い女子だったのでよく覚えていた。小学校卒業して間もなく北朝鮮へ帰還したと聞いているが、その後どうしているのだろうか?元気のだろうか?北朝鮮と自由に往き来できるようになり、同窓会で再会する日が来ることを切望する。▼最近、蔵書を大量に処分した。終活というわけではなく、書斎の床が抜けそうだったというのが理由である。小説は読んで面白かったものも含めて売り払い、途中で投げ出したものも含めて手強い本が残った。今後ページを開く可能性を考えたら自然にそうなった。▼今号で「学制改革」として、一中(城山中)、二中(白鷗中)の誕生した頃の思い出を語っていただいた。同じ時期に誕生した新制中学でもそれぞれ特色があって興味深い。▼野地芳男さんの「風外」は先号に続き、今号では真鶴以降の足跡について書いていただいた。生誕四百五十年記念展示会も松永記念館にて予定されている。ぜひ足を運んでいただきたい。また、半世紀前の本誌で、上曾我の穂坂辰巳さんが風外と定光院について書かれているので再録した。(編集子)

「小田原史談」原稿募集
論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。
〒二五〇一〇一五
南足柄市関本七三〇一六

電話 〇四六五七七三〇八七九
荒河純